

松本市文化財調査報告 No.152

長野県松本市

HIRATA KITA

平田北遺跡VI

—— 緊急発掘調査報告書 ——

2001.3

松本市教育委員会

長野県松本市

HIRATA KITA

平田北遺跡VI

—— 緊急発掘調査報告書 ——

2001.3

松本市教育委員会

序

平田北遺跡は松本市の南部、芳野地区に位置します。平成4年に初めての立会い調査、平成6年に初めての発掘調査が行われ、埋蔵文化財が確認されております。

このたび本遺跡範囲内に位置する、キッセイ薬品工業株式会社により社屋の建設事業が計画されたため、松本市が同社から発掘調査の委託を受け、埋蔵文化財を記録する目的で緊急発掘調査を実施することとなりました。

発掘調査は市教育委員会によって、平成11年11月から同年12月にかけて行われました。折からの寒風の中での調査となりましたが、関係の皆様の御尽力により無事終了することができました。発掘調査の結果、主に奈良時代の生活の跡を発見することができました。これらは今後、地域の歴史解明に大変役立つ資料になると考えます。

しかしながら、開発事業に先立って行われる発掘調査は、記録保存という遺跡の破壊を前提とする側面があることも事実です。開発により私たちの生活が豊かになる一方、それにともない歴史遺産が失われてしまうのは残念なことです。発掘調査により当時の生活が明らかとなり、私たちの郷土松本が歩んできた歴史が一つずつでも解き明かされることは大変貴重なことだと考えます。

最後になりましたが、発掘調査に多大な御理解と御協力をいただいたキッセイ薬品工業株式会社の皆様、地元関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成13年3月

松本市教育委員会 教育長 竹淵 公章

例言

- 1 本書は、平成11（1999）年11月24日～平成11（1999）年12月27日に実施された松本市芳野に所在する平田北遺跡第Ⅵ次調査の緊急発掘調査報告書である。
- 2 本調査はキッセイ薬品工業株式会社による社屋建設に伴う緊急発掘調査であり、同社から松本市が委託を受け、松本市教育委員会が発掘調査を実施、本書を作成したものである。
- 3 本書の執筆は、Ⅱ-1：太田守夫、Ⅱ-2-B：直井雅尚、Ⅲ-4-A：田多井用章、その他を加島泰祐が行った。
- 4 本書作成にあたっての作業分担は以下の通りである。
遺物洗浄：百瀬二三子
遺物保存処理・復元：五十嵐周子、内沢紀代子
遺構図整理：石合英子
遺物実測：太田圭郁、竹内直美、竹平悦子、洞沢文江、松尾明恵
トレース・版組：石合英子、太田圭郁、加島泰祐、櫻井了、中村慎吾
編集：加島泰祐
- 5 本書で使用した略号は以下の通りである。
住居址→住、建物址→建、土坑→土、ピット→P、溝址→溝、ラップル坑→R
ピットを除く各遺構の番号は過去Ⅰ～Ⅴ次調査で使用した番号に連続させた。
住居址：住15～27、建物址：建6～10、土坑：土12～30、溝址：溝6～11
- 6 図中で用いた方位記号は全て磁北である。
- 7 本報告書では過去の報告書で併用された調査次Ⅰ～Ⅴと調査地点A～Dを、混乱を避ける目的で調査次のみを表記に統一した。
- 8 調査実施及び本報告書作成にあたり、以下の方々から協力・教示を得た。記して感謝申し上げます。
太田守夫、竹原学
- 9 遺構・遺物の記述中で用いた古代の時期区分や遺構・遺物の分類、用語などの多くは下記文献に依った。
(財)長野県埋蔵文化財センター 1990 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4—松本市内1—総論編』
- 10 本調査で得られた出土遺物及び調査の記録類は松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館（〒390-0823 長野県松本市中山3738-1 Tel 0263-86-4710 Fax 0263-86-9189）に収蔵されている。

目次

序, 例言		Ⅲ章 調査結果	
目次, 図表目次		1 節 調査地・手順	10
Ⅰ章 調査の経緯		2 節 調査概要とまとめ	10
1 節 調査に至った経緯	1	3 節 遺構	
2 節 調査体制	1	A 竪穴住居址	11
Ⅱ章 遺跡の環境		B 建物址	14
1 節 地理的環境	3	C 土坑・ピット	14
2 節 歴史的環境		D 溝址	14
A I～V次調査の概要	5	4 節 遺物	
B 周辺遺跡の概観	8	A 土器・土製品	16
		B 石器	18
		C 金属器	19

図表目次

図目次	図版目次		
第1図 平田北遺跡の位置と周辺遺跡	2	図版1 住居址(1):住15・18	20
第2図 I～VI次調査地点土層柱状図	4	図版2 住居址(2):住17・20	21
第3図 平田北遺跡調査地点配置図	6	図版3 住居址(3):住19・21・24	22
第4図 I～V次調査地点遺構配置図	7	図版4 住居址(4):住22・23	23
第5図 VI次調査地点遺構配置図	9	図版5 住居址(5):住25・26・27	24
		図版6 建物址:建6～10	25
		図版7 土坑, 溝址	26
		図版8 土器(1)	27
		図版9 土器(2)	28
		図版10 土器(3)	29
		図版11 土器(4)	30
		図版12 土器(5)	31
		図版13 土器(6)	32
		図版14 土器(7)	33
		図版15 土器(8)	34
		図版16 土器(9)	35
		図版17 金属器, 石器	36

写真図版目次

写真図版1:調査地点全景	37	写真図版2:遺構	38
--------------	----	----------	----

I 章 調査の経緯

1 節 調査に至った経緯

松本市芳野19番48号に所在するキッセイ薬品工業株式会社敷地内に、キッセイ薬品工業株式会社により開発行為（社屋建設）の計画が立てられた。同予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地である平田北遺跡に該当したので、事業者の協力を得て、遺跡の有無及び範囲確認を目的として、事業に先立ち試掘調査を実施した。

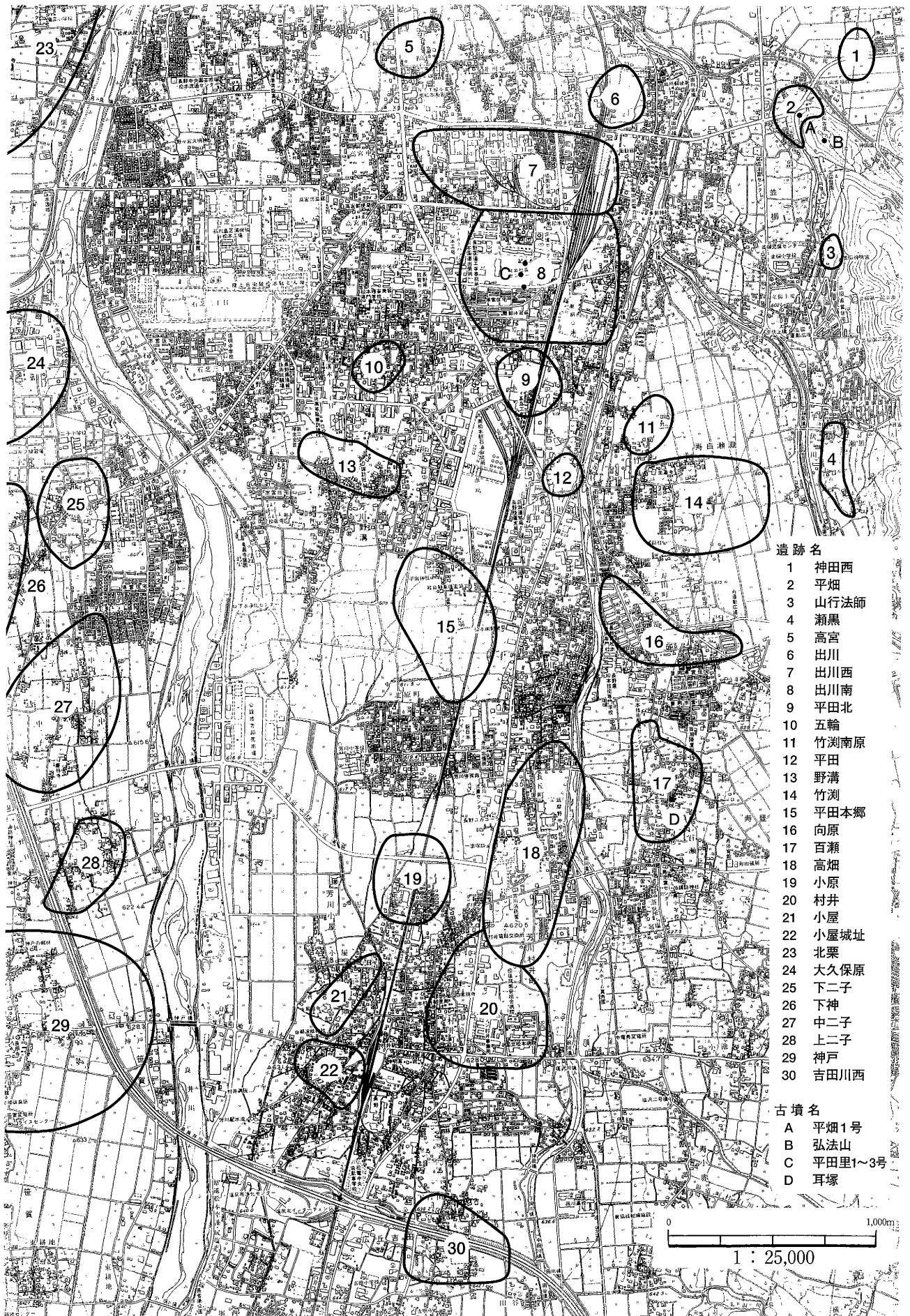
試掘調査は平成11（1999）年11月4日～8日（土・日を除く）に実施され、奈良時代の遺構・遺物を確認した。上記の結果を踏まえ、事業者と松本市教育委員会で事業予定地内の埋蔵文化財の保護方法を協議した結果、緊急発掘調査を実施して記録保存を図ることとした。

発掘調査の実施にあたり、事業者と松本市の間に平成11（1999）年11月18日付けで発掘調査業務の委託契約が締結され、松本市教育委員会が発掘調査を実施する運びとなった。平成11（1999）年11月24日～同年12月27日に現地での発掘調査を実施し、終了後引き続き松本市立考古博物館で整理作業及び本報告書の作成を行った。

2 節 調査体制

調査団長	竹淵公章（松本市教育長）
調査担当者	竹原 学（文化課主事）、米久保治郎（同嘱託）、加島泰祐（同）
調査員	今村克、松尾明恵
協力者	浅井信興、浅輪敬二、荒井留美子、飯島由次、石井脩二、今井太成、内沢紀代子、大月八十喜、上條道代、神田栄次、斎藤政雄、鷺見昇司、高橋昭雄、竹内直美、竹平悦子、鶴川登、中上昇一、中村恵子、中村安雄、中谷高志、畑茂、林和子、林武佐、藤本利子、布野行雄、布山洋、洞沢文江、村山牧枝、百瀬二三子、百瀬二三子、百瀬義友、横山清
事務局	松本市教育委員会文化課 木下雅文（課長）、熊谷康治（課長補佐）、松井敬治（同）、直井雅尚（主査）、武井義正（主任）、久保田剛（同）、酒井まゆみ（嘱託、～平成12年6月）、渡邊陽子（嘱託、平成12年7月～）





第1図 平田北遺跡の位置と周辺遺跡

II 章 遺跡の環境

1 節 地理的環境

1 位置と地形

本調査地は松本市芳川野溝地籍、国道19号線とJR篠ノ井線が交差する地点の北側、キッセイ薬品工業株式会社の敷地内に位置する。標高599m前後、出川南遺跡・平田里古墳群（松本市文化財報告No.115、以下報告～とする）の南300m、平田遺跡（調査歴なし）の北北西200mにあたる。この付近一帯は第2次世界大戦末の工場疎開による工業団地造成までは広大な桑園と普通畑であった。1942年、日本ステンレス・石川島芝浦タービン・宮田自転車等の軍需疎開工場、1944年の南松本駅新設により、土地の削平、平坦化、客土が行われ、その様相を一変させた。戦後、食糧不足・食料増産のための土地造成が行われ、広く水田化した。1963年の国道19号線バイパスの開通を契機に、調査地周辺にはわかに開発の波が及び、市場・工場・住宅の各団地や店舗により都市化した。そのため現在、原地形は想像も出来なくなっている。

地形上は北流する東の田川と西の奈良井川に挟まれた地域で、現河床との距離はそれぞれ400m、1900mである。田川の氾濫及び牛伏川の沖積扇状地性堆積物（氾濫原）と奈良井川の沖積扇状地性堆積物との接触地帯にあたる。この接触地帯はJRの線路に沿い北北東（N-18°E）へ進む。村井小原遺跡（報告No.86・107・123）、平田本郷遺跡Ⅲ（報告No.138）、出川南遺跡群はいずれもこの接触地帯に属している。本調査地付近は田川の現河床と並行し、周辺では最も低い地帯を作っていて（平均傾斜3/1000、奈良井川扇状地7/1000、牛伏川扇状地15/1000）、古くから平田地籍の中心せぎである「じあんどせぎ」が蛇行していた。

じあんどせぎは田川を取水口とし、奈良井川系の水も集め北流し（灌漑・排水）、やがて出川・井川城の低湿地に入り、穴田川の源流ともなっていた。現在は市街化にともない、水路は舗装されたり、暗渠になって存在する。

以上のような地形・地層の状況は、第Ⅰ次から第Ⅵ次まで行われた発掘の立会い調査報告書にも報告されている。現状において微地形の把握や古環境の復元が困難であるにもかかわらず、地下の土層状況が保存され確認できたことは重要で、時代の経過との対比を可能にしている。

2 地層（土層）と堆積

i 土層の概観

以上の考察と第Ⅰ次から第Ⅵ次にわたる発掘で現われた土層の堆積、及びその基本土層図によると、土層は田川系統で、地形的異常のない水平の層からなっている。これらを上部から不整合面を挟んで分けると、およそ次のようになっている、それぞれの時代に対応していると考えられる。

- 1 表土 厚さ1m前後、工場用地の埋立て客土。
- 2 青灰色土 厚さ20～30cm、グレイド化、戦後の開田と水稻栽培。
- 3 開田以前の堆積層 深さ120～130cm以下の層。上部は桑園・普通畑に利用された黄灰色、暗黄灰色の壤土であるが、場所によって黄灰色のシルトに変わる。下部は黄灰色土、黄灰色シルト、暗灰色土、暗黄灰色土、暗褐色土、暗黄灰色シルト等の暗色土が目立つ。これらの下層には砂質土、砂質シルト、細砂、粗砂が見られる。また、ほとんどの層に量の多少に違いはあるが、鉄分の沈殿が見られるのは、田川水系の特徴である。

ii 土層の堆積

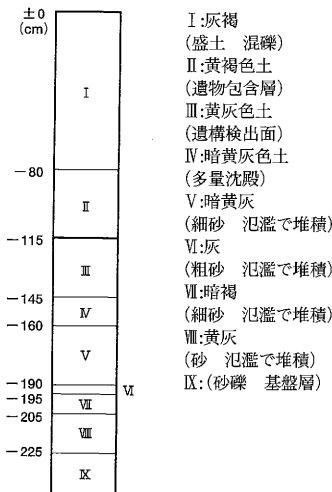
本調査で現われた3の土層には、周辺における田川と奈良井川との接触地帯の各遺跡に見られる砂礫層の流入は観察されない。ほとんどが穏やかな流れの堆積と見られるシルト質土壌、細砂一部粗砂からなっていて、出川・井川城の低湿地の堆積とも異なる。たびたびの流れによる堆積・滞水で作られ出された、比較的安定した土層といえる。観察が出来た3の土層の厚さは、それぞれおよそ165・90・130・75・180cm等である。これらの層の連続性については、発掘地点の最も近いⅡ次とⅥ次に類似性が見られるが、他は距離が離れているため対比は難しい（Ⅵ次の地点は滞水性の堆積の傾向）。しかし、深さ130～160cmのⅣ層（Ⅵ次ではⅥ層）に、鉄分多量の暗黄灰色土があり、堆積時の共通性が見られる。この層を含む前後の層に遺構や出土物が発見されている。堆積の不整合面は深さ2m前後に考えられるが、他ははっきりしない。基底の礫層はⅠ次のⅨ層、Ⅵ次のⅩⅢ層で見られるが（230～270cm）、この頃に礫の堆積するような環境（田川の流れ）があったと思われる。したがって基底礫層以後の堆積は穏やかに行われたもので、流れ・滞水などの同時堆積、同時異相の状態を示していることになる。調査結果によると、平安時代までの遺構を切って流れた、中世以降の自然流路や人工の溝が報告されている。さらにこの流路や溝が黄褐色土により埋められている。また住居址を含む遺構面は旧地表面と考えられ、本調査地の土層の形成過程が観察できる。いずれも歴史時代における不整合面である。

3 地形の形成

以上の観察から地形の形成順を概観すると、下部から次のように考えられる。

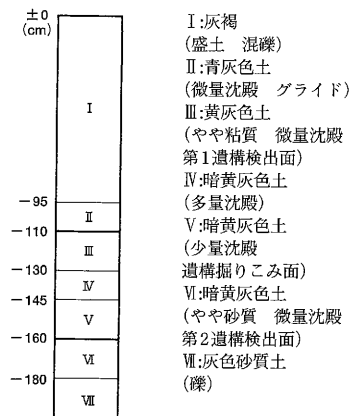
- ① 基底砂礫層の堆積
- ② 住居址を含む遺構面 旧地表面と土層 (黄灰色土・暗黄灰色土・暗黄灰色シルト)
- ③ 自然流路、溝が作られた土層 平安時代～中世
- ④ 流路や溝を埋めた土層 中世以降 (黄褐色土・黄灰色土・黄灰色シルト・客土されるまでの畑や水田に利用された土層)
- ⑤ 客土 戦中、戦後の工場・市場・住宅団地化による埋立

I 次調査地点 R1



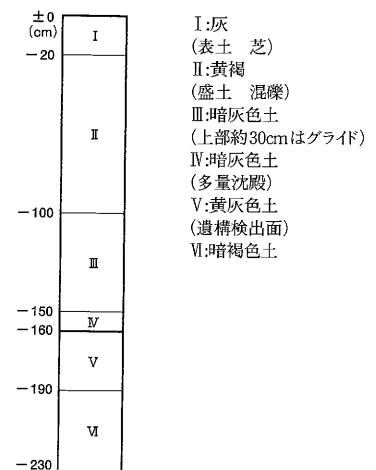
R 4・5の I・II 層間で青灰色土 (グライド) を確認した。R 2～5の II・III 層間で遺物を包含する暗褐色土を確認した。

II 次調査地点

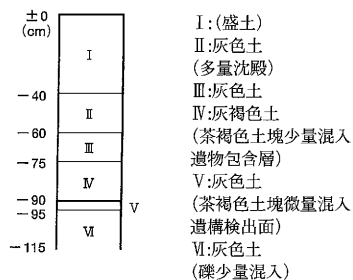


第5号住居址を検出したR19ではII層は確認されず、I層直下に暗褐色土が見られた。水田耕作以前は全面に広がったと考える。

III 次調査地点 試掘坑南壁

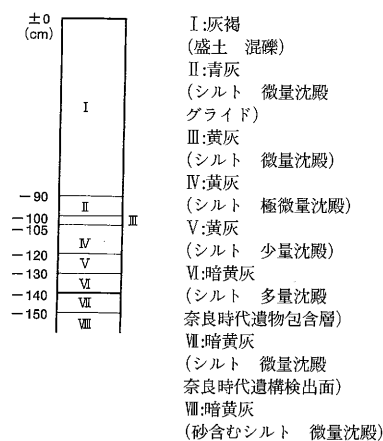


V 次調査地点 住13セクション

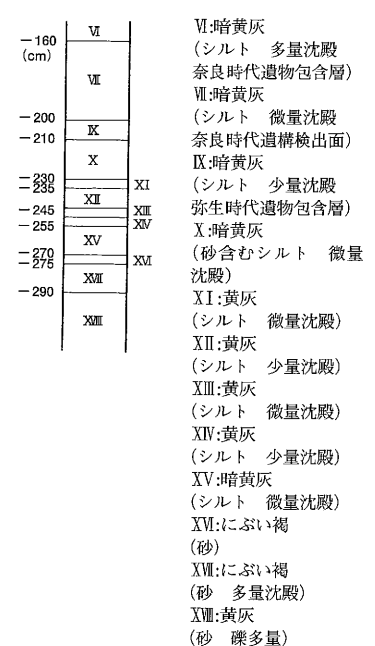


(注) 土層一覧中の「～量沈殿」は「鉄分～量沈殿」を示す

VI 次調査地点 a区西壁



VI 次調査地点 a区北壁



第2図 I～VI次調査地点土層柱状図

2節 歴史的環境

A I～V次調査の概要 (p.5 第1表、p.6 第3図、p.7 第4図参照)

平田北遺跡では今回の発掘調査以前にI～V次の発掘調査、試掘・立ち会い調査を実施した。各調査地点は全てキッセイ薬品工業株式会社の敷地内に位置する。以下では、各調査地点の調査成果等を略述する。

1992 (I次) :製剤工場増築工事に併行して、1992年11月13日から同月20日にかけて立ち会い調査を実施した。東西28.9m、南北11.8m、面積約500m²の工事範囲中、東西5列、南北3列の合計15箇所、総面積約250m²の基礎部分のみを調査範囲とし、重機で遺構面を検出し、遺構等の記録を留めた。基礎部分のラップル坑は一辺の長さが4～5mで、深さは2～2.5mに及んだが、開発が進行し、現状での旧地形・環境の復元の困難な本遺跡周辺地域の土層堆積状況を確認できたことは重要である。確認した遺構は竪穴住居址4棟、土坑3基、焼土(坑)1基、ピット8基である。他に自然流路1条を確認した。遺構・遺物の時期は概ね7世紀代から9世紀代である。第1号住居址は5世紀代に属し、北接する平田里古墳群と時期が一致し、関連性が指摘された。

1993 (II次) :事務所建設の基礎工事に併行して、1993年6月2日から同月7日にかけて立ち会い調査を実施した。調査地の総面積は681.5m²だが、21箇所の基礎坑(ラップル坑)の掘削部分のみを調査した。重機を使用して掘削し、以後の作業は人力に依った。地表下110cm(第III層上部)付近と、同160cm(第VI層上部)付近で遺物包含層を確認したが、第1遺物包含層(III層)での遺構の存在は希薄だったので、地表下160cm付近まで掘削し、遺構を検出した。確認した遺構は竪穴住居址4棟、建物址4棟、ピット3基である。遺構・遺物の時期は7世紀末から9世紀代である。調査地西端部にも遺構が分布したことから、遺跡範囲が国道19号線を越えて西側に広がる可能性が指摘された。

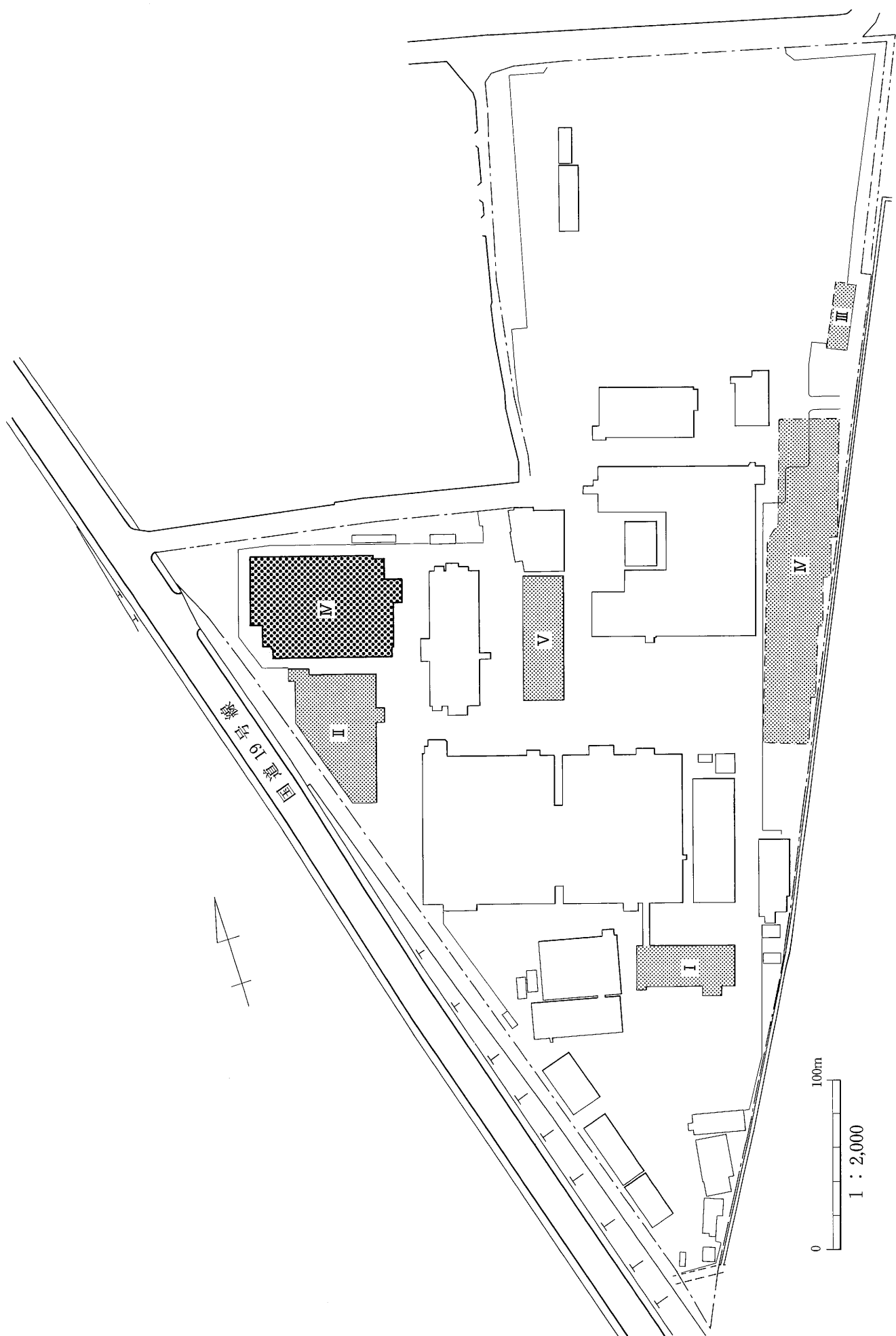
1994 (III次) :終末排水処理施設建設に先立ち、1994年8月31日から同年10月6日にかけて発掘調査を実施した。実質調査面積は120m²である。確認した遺構は竪穴住居址3棟、土坑6基、ピット22基、溝2条である。住居址と土坑は奈良時代から平安時代の遺構である。殆どのピットと溝2の覆土は市域の中世遺構で観察される灰色系と同系色を呈したので、同時期の遺構と考えられたが、中世の遺物は皆無だった。溝3は自然流路である。

1994 (IV次) :本調査地点は工事に伴う掘削が遺構面まで達さず、出土遺物も2点の土器片のみだったので、調査に至らなかった。

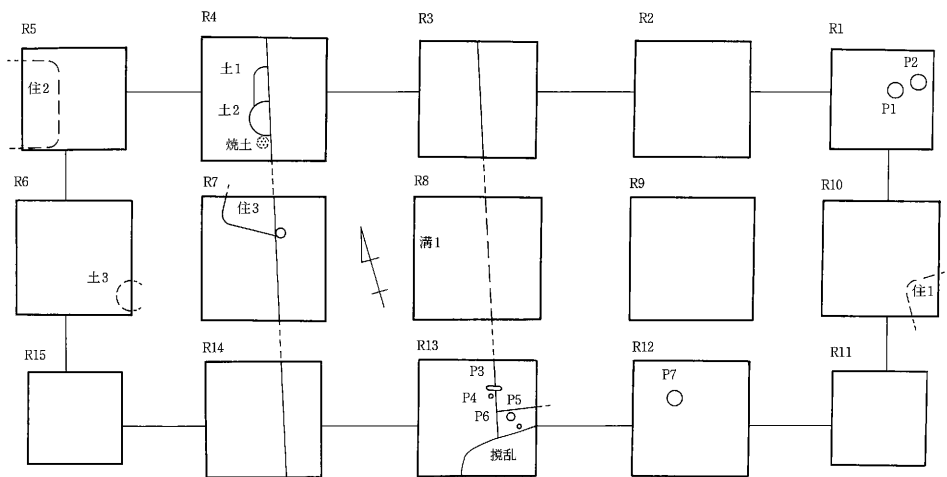
1994 (V次) :事務棟新築に先立ち、1994年12月12日から同月22日にかけて発掘調査を実施した。調査面積は420m²である。確認した遺構は竪穴住居址3棟、建物址1棟、土坑2基、ピット74基、溝2条である。住居址の時期は9世紀中頃から後半、建物址は古墳時代末と考えられた。直径35cm迄の小型ピットと溝4の覆土は灰色系を呈したので、III次調査地点のピット同様、中世の遺構と考えられた。

調査次・(地点)	期間・方法	面積	調査成果			備考
I-(A)	1992.11.13～20 掘削工事立ち会い調査	250m ²	住1:5C 住2:7C後半～8C前半 住3:不明 住4:9C後半	土1・2:7C 土3:9C後半	P1～8:P2は9C後半、P2以外は不明 焼土(坑)1ヶ所:不明 溝1:9C後半以降の自然流路	約500m ² の調査範囲中、15箇所の基礎坑部分のみを調査した。
II-(B)	1993.06.02～07 掘削工事立ち会い調査	147m ²	住5:9C 住6:不明 住7:7C末～8C前半 住8:不明	建1:8C後半以降 建2:8C後半以降 建3:不明 建4:不明	P9～11:不明 焼土1:5住に伴う 焼土2:8住に伴う	約682m ² の調査範囲中、21箇所の基礎坑部分のみを調査した。遺構検出面を2面確認した。
III-(C)	1994.08.31～10.06 発掘調査	120m ²	住9:平安以降 住10:9C前半 住11:8C初頭	土4～8:奈良～平安 土9:不明	P12～33:大部分は中世 溝2:中世以降 溝3:自然流路	現状では、平田北遺跡の東端に位置する。
IV-(旧D)	1994.10.31～11.17					掘削が遺構面に達さず、調査に至らなかった。
V-(D)	1994.12.12～22 発掘調査	420m ²	住12:9C後半 住13:9C後半 住14:9C中頃～後半	建5:古墳末 土10・11:不明	P34～108:直径35cm未満のピットは中世 溝4:中世以降 溝5:不明	遺構検出面は現地地表下90cmに位置し、他の調査区に比べ浅い。

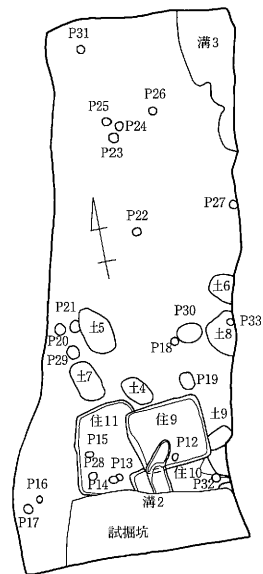
第1表 I～V次調査概要一覧



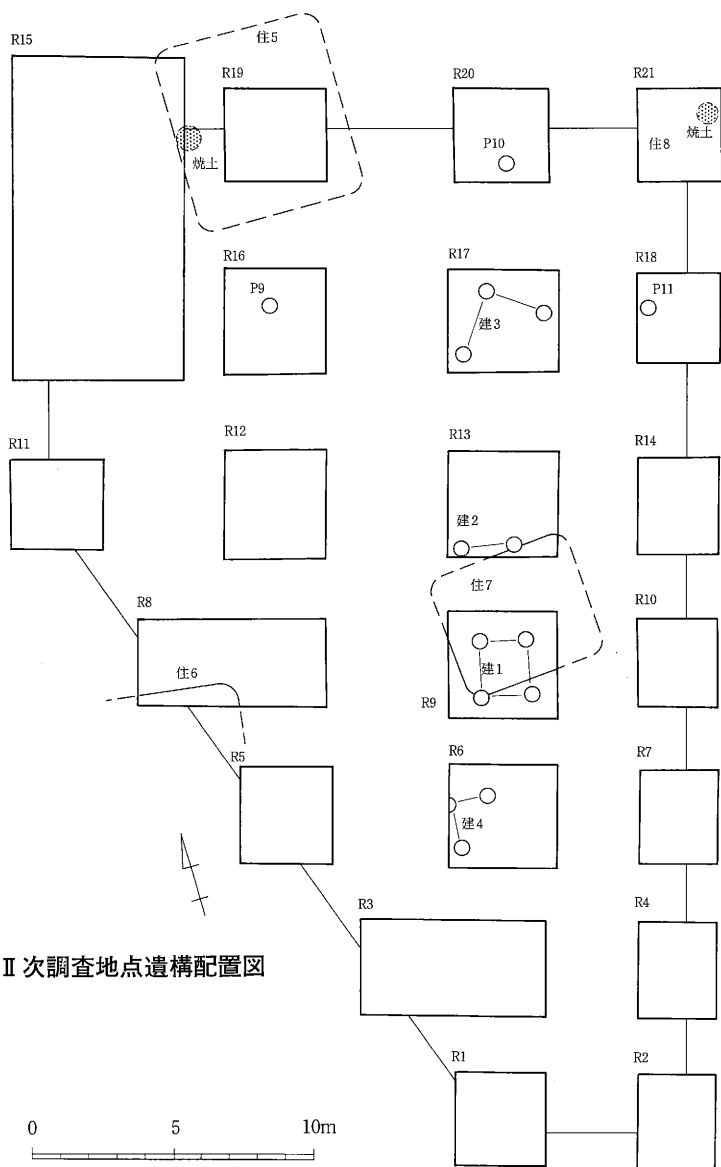
第3図 平田北遺跡調査地点配置図



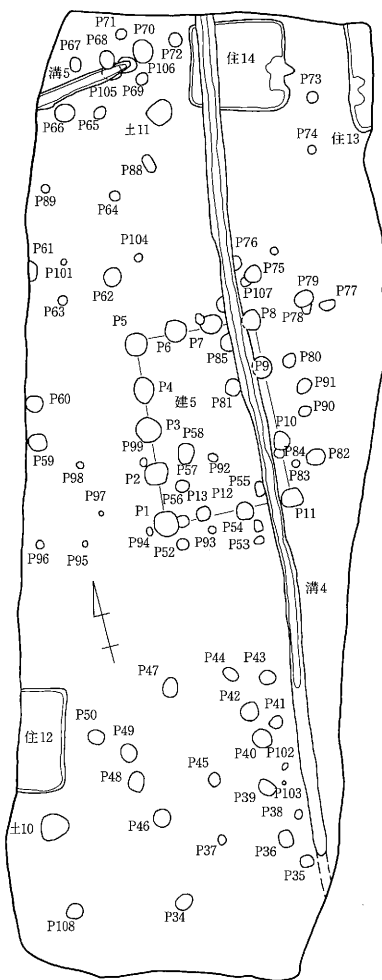
I次調査地点遺構配置図



III次調査地点遺構配置図



II次調査地点遺構配置図



V次調査地点遺構配置図

第4図 I~V次調査地点遺構配置図

B 周辺遺跡の概観 (p.2 第1図参照 本文中の括弧内の数字は第1図内の遺跡番号を示す。)

平田北遺跡の周辺遺跡は、西の奈良井川、東の田川を大きな区画として、大きく4ブロックに分けることができる。第1のブロックは奈良井川西岸の段丘上に南北に連なる遺跡群(23～29)で、島立・笹賀・神林地区に相当する。第2のブロックは田川東岸の段丘や微高地上に点在する遺跡(11・14・16・17)で、寿地区にあたる。第3のブロックは奈良井川、田川間の地域で、しかも本遺跡から平田本郷遺跡(15)の付近を南限とするまとまり(5～9・12・15)である。現在のJR南松本駅周辺を含み芳川平田地区に及ぶ。最後の第4のブロックが平田本郷遺跡(前出)を北限とする、奈良井川、田川間の諸遺跡(15・18～22)で、芳川地区から一部は塩尻市吉田地区に広がっている。

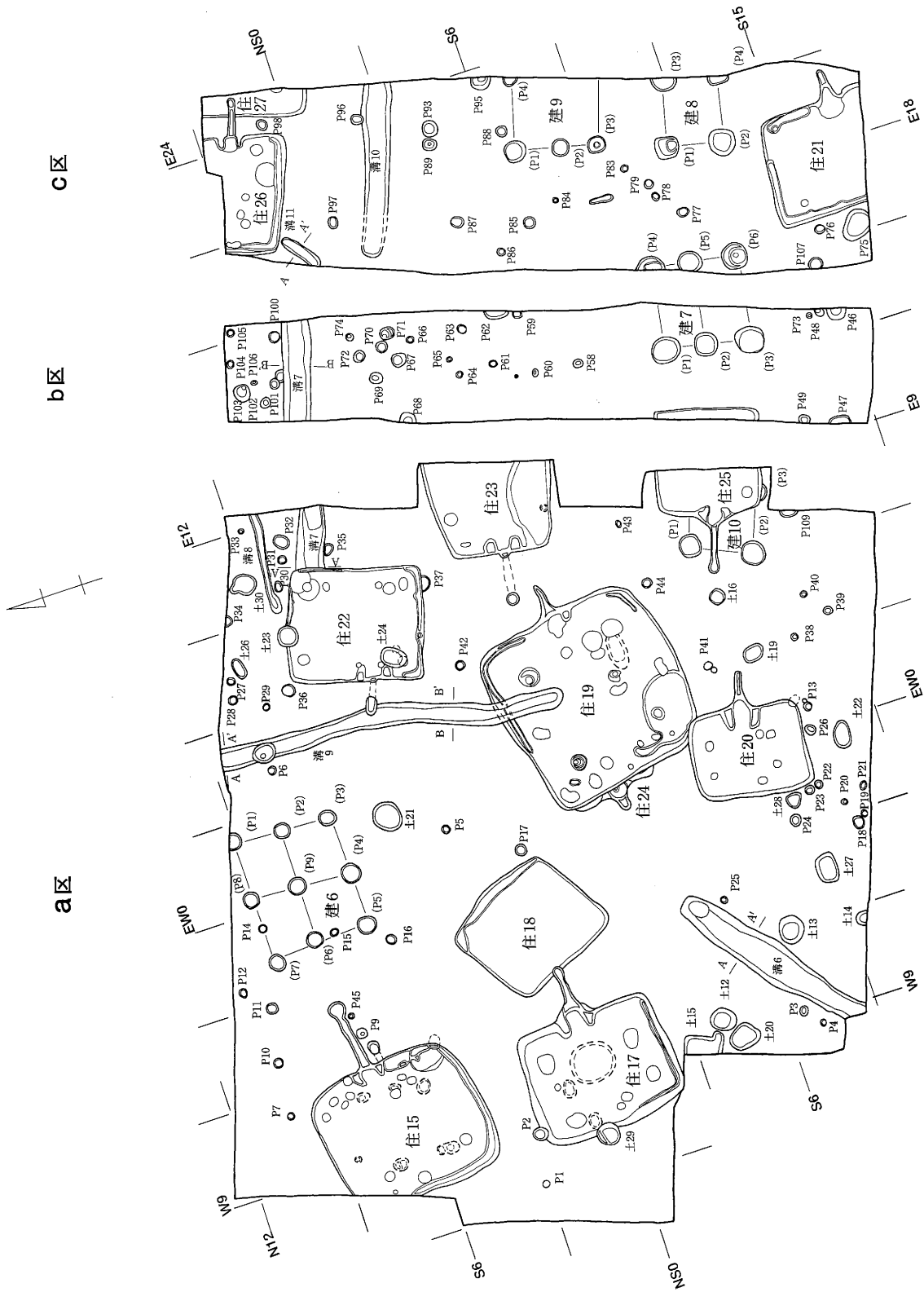
第1ブロックの遺跡の初源は7世紀末から8世紀で、それ以後、急速に大規模な集落が展開する。まれに下層に縄文中期～後期(26：下神、28：上二子)が存在するが、継続性では古代とのつながりはまったくない。この第1ブロック一帯は現在でこそ肥沃な水田地帯となっているが、古墳時代後期までは河岸段丘上の水利の悪さから本格的な開発が行われなかったと考える。7世紀後半に至り、自然流路の改修管理(あるいは大規模な人為導水を含む)によって水利問題が解消し、爆発的な開発が始まったと推定している。

第2のブロックは、初源が弥生時代中期後半(17：百瀬遺跡)から後期(11：竹瀧南原遺跡、14：竹瀧遺跡)まで遡り、その後も古墳時代から平安・中世にかけて断続的に集落が立地する。田川は右岸(東岸)に安定した小規模な段丘や微高地を形成し、川沿いには低湿地を発達させており、これらの恵まれた自然条件により、本ブロックは古くから安定した居住域であったと推定できる。百瀬遺跡の第2次調査(平成4年)では縄文早期押型紋期に遡る土坑も調査されている。ただし、近世以降になると田川の東側を北流する牛伏川が氾濫を繰り返し、頻繁に田川に切れ込んだため、東岸の遺跡地帯を大きく破壊している。現在確認されている遺跡はこの氾濫の直撃を免れたものである。

第3のブロックは松本市内では珍しい沖積地状の平坦地に展開する遺跡群である。集落の初源は弥生時代中期前半～中葉(7：出川西、9：平田北)に遡り、以後は古墳時代から平安時代までの遺構が重厚に分布する。平地に築造された古墳時代中期の古墳(C：平田里1～3号古墳)も発見されている。また、南松本駅東方約1.5kmの中山丘陵突端には前期の前方後方墳である弘法山古墳(B)が築かれており、本ブロックがその造営集団の主力と目されている。この一帯の北部には湧水帯がひろがり、田川左岸にも低地帯が延びて、ここを生産地とする有力な集落が弥生時代から継続して生まれ、古墳造営にまで至ったと推定される。

第4のブロックでは、わずかに縄文晩期後半の遺構・遺物が散見されるが継続することなく途絶え、次に遺跡が進出するのは8世紀代以降である。他のブロックに比べて最も遅く開発が始まった地帯で、その原因は水利の悪さであったと考える。しかし、9世紀以降は拠点的な集落(15：平田本郷、19：小原、30：吉田川西など)が立地し始め、中世にかけて非常に繁栄した(小原と塩尻市若宮では多量の備蓄銭も発見されている)。交通の要路に位置するようになった可能性を指摘したい。

本遺跡は上記第3ブロックの南部に位置し、内容的には当ブロックの典型的なあり方を示す。すなわち、今回の調査では弥生中期前半～中葉の遺物包含層と8世紀前半代を中心とする集落を確認し、平成4・5・6年の調査では5世紀代と9・10世紀代の遺構を発掘している(本稿Ⅱ章2節A参照)。しかし、これまでの数少ない発掘や試掘結果からは、本遺跡から南へ転じるにしたがい急激に8世紀以前の要素が失われ、第4ブロックに移行すると推測されており、その点からは、本遺跡が第3ブロックの沖積地性の遺跡立地の南限地帯を示す内容を有するものとの視点から注目することも必要であろう。



第5図 VI次調査地点遺構配置図

Ⅲ章 調査結果

1 節 調査地・手順

発掘調査地は松本市芳野19番地48号に位置し、北側を芳野町の住宅街、東側をJR篠ノ井線、西側を国道19号線に画され、南側でJR篠ノ井線と国道19号線が交差する。発掘着手前は駐車場だった。調査前の発掘調査地表面の標高は海拔594.70m前後である。

調査地点は南北に走る地下埋設ケーブルで3区に分断されたが、便宜上、西側地区からa、b、c区とした。調査面積はa区452.00㎡、b区73.60㎡、c区128.60㎡、総面積654.20㎡を測る。磁北方向に沿って3mのグリッド方眼を設定し、測量・遺構実測を行った。グリッド方眼の名称は各グリッド北東隅の座標を以ってあてた。

発掘調査地内に排土置場を確保しつつ、可能な限り広範囲を調査する目的で、調査地をa区とb・c区に分けて調査した。大型建設機械を使用して、遺構検出面である微量の鉄分の沈着した暗黄灰色土層(Ⅶ層)までの盛土等の上土を除去した後、人力で遺構検出作業を行い、個々の遺構の位置と範囲を平面的に特定した。a区東半等、鉄分が比較的多く沈着し、遺構検出の困難な部分は、人力でグリッド毎にさらに掘り下げ、遺構を特定し、遺物を回収した。検出した遺構に遺構番号を付したが、累積検出数の多いピットを除き、遺構番号は第Ⅰ～Ⅴ次調査で使用した番号に連続させた。人力で遺構を掘り下げ、必要に応じて覆土の土層や遺物出土状況等を写真と図面に記録し、最終的にキッセイ薬品社屋屋上から調査地の全体写真を撮影して全作業を終了した。

2 節 調査概要とまとめ

全調査区で確認した遺構の種別と数、時期は以下の通りである。

竪穴住居址12棟(住15～27;住16は欠番とした):1～2期

建物址5棟(建6～10):1～2期と考える

土坑16基(土12～30;土17・18は建10のピットになり欠番、土25は欠番とした):1～2期と考える

ピット75基(P1～109;P50～57、P80～82、P91・92・94・109は建物址の柱穴とし欠番):1～2期と考える

溝址5条(溝6～11):1～2期と考える

出土遺物の種別は以下の通りである。一部の弥生時代遺物を除き、奈良時代初頭(1～2期)に属する。

土器:弥生土器、土師器、須恵器

石器:砥石状石器、粗質石材を素材とした主にカマド構築材と考えられる広義の石器群、緻密質石材を素材とする石器群(弥生時代)

金属器:鎌、刀子、釘、鉄滓

当初、Ⅵ・Ⅶ層層理面に遺構検出面を設定する予定だったが、調査地点(特にa区)の大半でⅥ層を僅かに残してしまった。同層残存部分にグリッドを設定し、人力で掘り下げて遺構を検出したが、結果的に非常に高い位置で遺構範囲を特定できた。各遺構、特にカマドの遺存状況は極めて良好だった。少なくない量の粗質石材(主に硬砂岩)を素材とする広義の石器群(主にカマド構築材)を検出したが、認定および取り上げの不徹底から、主に接合関係から得られる時間的遺構間関係の検証作業(平瀬遺跡Ⅱ:松本市文化財報告 No.142参照)に供し得る資料的価値を失ってしまった。比較的風化進行速度の遅い硬砂岩をカマド構築材素材とし(奈良井川・鎖川流域の遺跡を想定する)、出土土器から推定される遺構の時期に一定の纏まりがある等、今後、本遺跡に類する条件を有する遺跡を調査する際には石器認定・回収基準を統一し、回収精度を高めることが必要である。

3節 遺構

A 竪穴住居址 (p.15 第2表参照)

(1) 第15号住居址 (遺構:p.20 図版1、遺物:土器 pp.28・29 図版9・10 :石器 p.36 図版17)

検出状況：a区北西に位置する。北西隅は調査区外に達する。覆土の状況：カマド等屋内施設部をのぞき、8層（Ⅰ～Ⅶ、Ⅺ）に細分したが、Ⅴ層より上位の暗黄褐色系土層と下位の灰褐色系土層、貼床であるⅪ層に大別できる。炭化物粒、焼土塊等が混入するⅣ-Ⅴ層層理面での凹地の二次的利用を想定する。平面形・規模：南北に長い長方形を呈し、長軸524cm、短軸472cm、壁高48cm、推定床面積21.7m²を測る。カマド：東壁中央に位置する。2本の煙道を検出したが、北側の煙道が住15に付帯する。貼床面上に構築し、暗黄灰色粘質土で袖部を形成する。奥壁は東壁を僅かに掘り込む。煙道部は184cmで先端部に長・短径52cm、深さ12cmの排煙口が形成される。南側の煙道は別住居に付帯すると考える。煙道がより東方に延びる可能性も有るが、現状では、当期の煙道の平均長から考えて、住15内西寄りの位置に構築された比較的小型の住居址上に住15を構築した結果、旧住居址の煙道の一部が残存したと考える。主柱穴：4基を確認した。その他の屋内施設：南・西壁下で周溝状の掘り込みを確認した。南東隅の壁から遺構外方向に掘り込まれたピットを確認したが住17・20に共通する。カマド右袖の南側に位置するピットから多量の土器が出土した。遺物出土状況：Ⅲ・Ⅳ層理面から上層に多くの大破片が、カマド・P14・貼床であるⅪ層に破片が集中する。

(2) 第17号住居址 (遺構:p.21 図版2、遺物:土器 p.30 図版11)

検出状況：a区西寄りに位置する。排煙口が住18を切る。P2、土18に切られる。覆土の状況：黄色味を帯び、ブロック土・鉄分を混入するⅠ・Ⅱ・Ⅲ層と、Ⅳ・貼床のⅩⅢ・カマドを埋める層等の比較初期の堆積土で灰色を帯びる層に大別できる。貼床は比較厚く貼られる。平面形・規模：南北方向に長軸を有する長方形を呈し、長軸492cm、短軸396cm、壁高44cm、床面積15.0m²を測る。カマド：東壁のほぼ中央に位置する。燃烧部は東壁を函形に掘り込んで構築し、火床面は貼床を浅く掘り込んで形成される。煙道部は116cmである。煙道先端部に排煙口が形成され、同排煙口内から1個体分と考えられる土師器甕片が出土した。主柱穴：4基を確認した。その他の屋内施設：床面で円形の掘り込みを検出した。覆土は貼床土である。南東隅の壁から遺構外方向に掘り込まれたピットを確認した。南壁と、西壁南半部直下で周溝状の掘り込みを確認した。遺物出土状況：カマドと排煙口に集中するが、全体的に少ない。

(3) 第18号住居址 (遺構:p.20 図版1)

検出状況：a区のほぼ中央に位置する。住17の排煙口に切られる。覆土の状況：Ⅰ・Ⅱ層はほぼ同質、Ⅲ層は炭化物の有無で他と判別した。平面形・規模：長方形を呈し、長軸396cm、短軸364cm、壁高40cm、床面積12.3m²を測る。炉：確認できなかった。主柱穴：確認できなかった。その他の屋内施設：東壁沿いに段状の張り出しが有る。遺物出土状況：遺物が殆ど無く、住居址と断定できない。

(4) 第19号住居址 (遺構:p.22 図版3、遺物:土器 pp.31・32 図版12・13 p.35 図版16)

検出状況：a区のほぼ中央に位置する。住20と溝9に切れ、住24を切る。覆土の状況：住居址主体部の堆積であるⅠ・Ⅱ層、周溝部のⅢ層、カマドと煙道に関連するⅣ・Ⅴ・Ⅵ層、貼床のⅦ層、ピットの堆積土であるⅧ層～ⅩⅧ層に大別できる。貼床土は厚く貼られる。床面が周辺部に向かって深く形成された結果、周辺部に特に厚い貼床が貼られたと考える。カマド周辺を中心として貼床土には少なくない量の炭化物が混入するが、住24のカマド周辺の土や床面に近い部分の土が利用されたか、本住居の鍛冶炉に関係する土が混入した結果と考える。平面形・規模：ほぼ方形を呈し、長軸608cm、短軸592cm、壁高42cm、床面積31.2m²を測る、本調査で確認した最大の住居址である。カマド：東壁中央部に位置する。東壁を僅かに掘り込んで構築し、燃烧部はほぼ方形を呈する。火床面は貼床面を僅かに掘り込んで形成される。袖部の遺存状態は不良で、左袖は原形を留めない。左袖周辺に構築材として使用したと考え得る礫が散在する。現状での煙道長は116cmである。

支柱穴：4基を確認した。P4とP14の最下層の土は同質である。その他の屋内施設：北東・南東壁直下で周溝状の掘り込みを確認した。南半部に鍛冶炉と同関連施設が存在する。P9が鍛冶炉、P12・20が関係を想定する施設である。P9から数点の鉄滓、P12からフィゴと鉄製品、P20から炭化材が出土した。遺物出土状況：I・II層中に散在する。

(5) 第20号住居址 (遺構:p.21図版2、遺物:土器p.30図版11)

検出状況：a区南部に位置する。住19の南西隅を僅かに切る。覆土の状況：住居址主体部を焼土・炭化物粒の多寡、黒色土粒の有無等から3分層した。焼土塊が混入するIII層をカマド構築土の崩落に伴う堆積と考える。貼床は無い。平面形・規模：南北方向に長軸を有する長方形を呈し、長軸376cm、短軸296cm、壁高32cm、床面積9.4m²を測る。カマド：東壁のほぼ中央に位置する。東壁を北半のやや広い不正円形状に掘り込み燃焼部を構築し、火床面は床面より僅かに下位で形成される。袖は基盤土と同質の土で構築されるが、右袖ではVII層間に焼土・炭化物塊を多量に含むVIII層を挟む。現状での煙道長は76cmで、排煙口は検出出来なかった。支柱穴：4基を確認した。その他の屋内施設：南東隅の壁から遺構外方向に掘り込まれたピットを確認した。遺物出土状況：殆ど得られなかった。

(6) 第21号住居址 (遺構:p.22図版3、遺物:土器p.27図版8 石器p.36図版17)

検出状況：c区南端に位置する。南半部が調査区外にかかる。覆土の状況：炭化物粒、灰褐色土塊を混入するII層、カマド使用時の堆積土とカマド構築土の堆積のIII層、自然堆積のI層に大別した。平面形・規模：長方形を呈すると考える。現状での長軸492cm、短軸360cm、壁高24cm、床面積16.1m²を測る。カマド：東壁中央部付近に位置すると考える。奥壁が円形で全体的に三角形を呈する燃焼部は、東壁を掘り込んで構築する。火床面は床面を掘り込んで形成される。現状での煙道長は56cmである。支柱穴：確認出来なかった。その他の屋内施設：北壁の中央部付近から西壁下に周溝状の掘り込みがある。遺物出土状況：全体的に少ない。

(7) 第22号住居址 (遺構:p.23図版4、遺物:土器pp.32・33図版13・14 金属器p.36図版17)

検出状況：a区北東に位置する。P37、溝7・9を切る。覆土の状況：V層がカマド構築土を含む堆積であるのを除き、I～IV層はレンズ状を呈する自然堆積と考える。II層中にIII層がレンズ状に挟まるが、両層は同質であり、III層は風化度の異なる、部分的に変色したII層と考える。平面形・規模：南北方向に長軸を有する長方形を呈し、長軸440cm、短軸372cm、壁高52cm、床面積15.0m²を測る。カマド：西壁の中央部南寄りに位置する。燃焼部は函形を呈し、壁を掘り込まずに構築される。火床面は床面を僅かに掘り窪めた位置に形成される。両袖共に、同中央部に設置された長方形の礫を芯材として、黄灰色土で周囲を覆い形成される。芯材の下端は床面下に達する。奥壁はほぼ垂直に立ち上がる。トンネル状に残存する煙道部の長さは58cmで、先端部に長円形の排煙口を構築する。支柱穴：4基を確認した。その他の屋内施設：南壁と北東隅の壁直下で周溝状の掘り込みを確認した。遺物出土状況：III層堆積後に流入したと考えられる遺物が中央部に集中する。カマド周辺に大破片、完形に近い土器が集中する。

(8) 第23号住居址 (遺構:p.23図版4、遺物:土器p.35図版16 金属器p.36図版17)

検出状況：a区東端中央に位置する。東端部は調査区外にかかる。覆土の状況：主体部の堆積土中I・II・IV層を自然堆積土、III層をII～IV層層理面に部分的に形成された二次利用面と考える。南半部に局所的に貼床(VII・IX層)があり、P3が貼床土で埋められる。V・VI・VII層はカマド使用時の堆積土、カマド構築土の崩落部分を主体とする土である。平面形・規模：長方形を呈すると考える。長軸416cm、短軸推定400cm、壁高52cm、床面積推定13.6m²を測る。カマド：西壁中央部に位置する。壁を掘り込まずに構築し、燃焼部はほぼ方形を呈する。火床面は床面を僅かに掘り込んで形成する。煙道の天井部は完存し、煙道長98cm、排煙口は長径38cm、短径36cm、深さ39cmである。排煙口はほぼ円形を呈し、煙道部より深く掘り込まれる。支柱穴：確認できなかった。その他の屋内施設：特記すべき施設はない。遺物出土状況：II層中、床面直上、カマドに

多い。

(9) 第24号住居址 (遺構:p.22図版3、遺物:土器p.34図版15)

検出状況：a区のほぼ中央に位置する。住19に大部分を切られるので、確認し得たのはカマドと西壁に留まる。覆土の状況：全てカマド燃焼部周辺の堆積土である。Ⅰ層を、カマド天井部を主体とする燃焼部崩落・埋没後の堆積土、Ⅱ層をカマド天井部崩落土を主体とする堆積土、Ⅲ層をⅡ層の堆積土を含む堆積土と考える。Ⅳ層は袖部構築土である。平面形・規模：壁高が44cmである他、大部分は不明である。カマド：西壁中央部に位置する。西壁を煙道方向に長い楕円形状に掘り込んで構築する。火床面と床面のレベルはほぼ同じである。袖部は暗黄褐色土で構築され、左袖に芯材と考えられる小礫と土器片を含む。現状での煙道長は56cmである。支柱穴：確認できなかった。その他の屋内施設：確認できなかった。遺物出土状況：カマド内部とP1で土師器甕を得た。

(10) 第25号住居址 (遺構:p.24図版5、遺物:土器p.34図版15)

検出状況：a区東端南寄りに位置し、中央部東寄りには調査区外にかかる。住居址東端はb区に達する。建10を切る。覆土の状況：主体部を2分層した(Ⅰ・Ⅱ層)。Ⅲ層に煙道天井部、Ⅳ層に崩落したカマド構築土を混入する。平面形・規模：ほぼ方形を呈し、長軸356cm、短軸352cm、壁高52cm、床面積10.6㎡を測る。カマド：西壁中央部に位置する。壁を楕円形状に比較的大きく掘り込んで構築された燃焼部内には土師器甕他、多数の土器が遺存する。土師器甕の大破片の下で支脚石を抜き取った跡と考えられるピットを確認した。火床面は床面を僅かに掘り窪めて形成される。右袖中央・先端部に各1点、左袖中央部に1点の礫を配し芯材として、同芯材の周囲を暗黄灰色土で覆って袖部を構築する。煙道長は116cm、排煙口と考えられる煙道先端部の脹らみは長径40cm、短径36cm、深さ10cmである。支柱穴：確認できなかった。その他の屋内施設：特記すべき施設は確認できなかった。遺物出土状況：全体的に少ない。南西隅とカマド内で完形又は1個体分の甕を確認した。カマド袖部上の土器はカマド破壊又は破損後に遺棄したと考える。

(11) 第26号住居址 (遺構:p.24図版5、遺物:土器p.33図版14 p.35図版16)

検出状況：c区北端に位置する。煙道先端部が住27を切る。覆土の状況：主体部とカマド及び煙道を含め3分層した。Ⅲ層は煙道天井部の崩落土、燃焼部の天井、袖部構築土、一部貼床土を含むと考えられるが分層できなかった。Ⅴ～Ⅶ層は鍛冶炉と考えられる施設の層序である。平面形・規模：長方形を呈すると考える。長軸396cm、短軸推定380cm、壁高44cm、床面積推定13.0㎡を測る。カマド：東壁中央部に位置すると考える。燃焼部は函形を呈し、東壁を掘り込まずに構築される。火床面は床面とほぼ同じレベルに形成される。袖部は暗黄褐色粘質土で構築されるが、左袖前方の礫が袖部構築材だった可能性がある。煙道部は中央でやや凸である。排煙口の規模は長径36cm、短径24cm、深さ18cmで最深部は煙道の最深部よりも深い。排煙口の脇にこれに伴うと考えられる礫がある。支柱穴：確認できなかった。その他の屋内施設：南・西壁下で周溝状の掘り込みを確認した。南壁中央部付近のP5から多数の土器が出土した。住居址南半のほぼ中央部で鍛冶炉と考えられる施設を確認した。住19で同様の施設を確認した。鍛冶炉は3分層でき、Ⅴ層とⅥ層の被熱黒化層中から数点の鉄滓が出土した。遺物出土状況：カマド周辺に散在する。鉄滓がやや多い。

(12) 第27号住居址 (遺構:p.24図版5、遺物:土器p.30図版11)

検出状況：c区北東端に位置する。住26煙道部に切られる。大部分は調査区外にかかる。覆土の状況：焼土粒・塊を含まないⅠ層と貼床のⅥ層、上記以外のⅡ～Ⅴ層に3大別できる。一次生活面である床面は比較的平坦に形成し、暗黄褐色土で貼床を形成し、二次生活面としたと考える。南西壁に向かって厚さを増し、緩傾斜をなす貼床は、当該期ではやや変則的と言える。P1はⅢ・Ⅳ層とⅥ層の層理面から掘り込まれる。P1の最下層土と貼床土はほぼ同質で炭化物粒を多量に含むので、支柱穴とは考えがたい。平面形・規模：壁高が40cmである他、大部分が調査区外にかかるので詳細は不明である。カマド：調査区外に位置すると考える。支柱

穴：確認できなかった。その他の屋内施設：確認できなかった。遺物出土状況：I層中に比較的大型の破片が大量に含まれた。

なお、住17・27覆土より出土した炭化材について、樹種同定及び放射性炭素年代測定をパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼して行った。その結果、住17のものは、樹種がオニグルミで、測定年代は2,610±90年前、27住のものは樹種がモミ属で、測定年代は1,240±70年前（年代値は共に1950年を基点とした値）との結果が得られている。

B 建物址 (p.15第3表、p.25図版6参照)

(1) 第6号建物址

a区北端のほぼ中央に位置する。建6P1～9の合計9基のピットで構成される2間×2間の総柱建物址である。桁行と梁間の平均長は共に200cm、面積は13.0m²で、ほぼ方形を呈する。柱穴の平面形は円形で、平均規模は直径56cm、深さ52cmである。

(2) 第7号建物址

b・c区にまたがり、両区の南半に位置する。建7P1～6で構成される2間×1間の側柱式建物址である。桁行と梁間の平均長は各136・276cm、面積は7.6m²で、ほぼ方形を呈する。柱穴の平面形は円形で、平均規模は直径82cm、深さ42cmである。4基の柱穴で平均径22cmの柱痕を確認した。

(3) 第8号建物址

c区南半部東端に位置する。建8P1～4で構成される1間×1間の側柱式建物址と考える。桁行と梁間は各220・172cm、面積は4.2m²で、ほぼ方形を呈する。柱穴の平面形は円形で、平均規模は直径78cm、深さ46cmである。2基の柱穴で平均径20cmの柱痕を確認した。

(4) 第9号建物址

c区中央に位置する。建9P1～4で構成される2間×1間の側柱式建物址と考えるが、P4を除き柱穴列とすることも出来よう。桁行の平均長は134cm、梁間は248cm、面積は6.8m²で、長方形を呈する。柱穴の平面形は円形で、平均規模は直径60cm、深さ40cmである。2基の柱穴で平均径26cmの柱痕を確認した。

(5) 第10号建物址

a区南半部東端に位置する。建10P1～3で構成される1間×1間の側柱式建物址と仮定する。桁行と梁間は各212・204cm、面積は4.5m²で、ほぼ方形を呈する。柱穴の平面形は円形で、平均規模は直径74cm、深さ52cmである。

C 土坑・ピット (p.15第4表、p.26図版7、p.27図版8、p.34図版15参照)

16基の土坑と75基のピットを確認した。遺構検出段階で、比較的小型の穴をピット、より大型の穴を土坑としたが明確な分類基準は無い。土坑・ピット共に遺物出土量が多くなく、帰属時期を推定し得る資料も少なかったが、住居址出土土器の帰属時期である1～2期の遺構と考える。土4、P9・50・52・54出土土器を図示した。

D 溝址 (p.15第5表、p.26図版7、p.34図版15参照)

6条の溝址を確認した。いずれの溝址も土坑・ピットと同様に遺物出土量が多くなく、確実な帰属時期を示し得ないが、切り合い関係から溝7は奈良時代以前、溝9は同時代以後に帰属、いずれも1～2期に帰属すると考える。詳細は表に記した。

第2表 住居址一覧

住居No.	図版No.	平面形	規模 (cm・m ²)		主軸方向	主柱穴数(基)	カマド位置	煙道の長さ (cm) 排煙口の規模	時期(期)	備考
			長径×短径×壁高	床面積						
15	1	隅丸長方形	524×472×48	(21.7)	N-81°-E	4	東壁中央	236 52×52×12	2	区域外にかかる。 欠番
16										
17	2	隅丸長方形	492×396×44	15.0	N-86°-E	4	東壁中央	148 32×32×14	2	住18を切る。土18、P2に切られる。
18	1	不整長方形	396×364×40	12.3	N-30°-W				不明	住17に切られる。
19	3	隅丸長方形	608×592×42	31.2	N-78°-E	4	東壁中央	116	2	住20、溝9に切られる。住24を切る。
20	2	隅丸長方形	376×296×32	9.4	N-103°-E	4	東壁中央	76	1・2?	住19を切る。
21	3	不整長方形	492×360×24	(16.1)	N-90°		東壁	48	1・2?	区域外にかかる。
22	4	長方形	440×372×52	(15.0)	N-75°-W	4	西壁中央	120 62×32×12	2	溝7・9、P37を切る。土12に切られる。
23	4	長方形	416×(400)×52	(13.6)	N-80°-W		西壁中央	136 38×36×39	1	区域外にかかる。
24	3	不明	壁高44	(0.8)	N-100°-W		西壁	56	1・2?	住19に切られる。
25	5	方形	356×352×52	(10.6)	N-74°-W		西壁	156 40×36×10	1~2	建10を切る。区域外にかかる。
26	5	隅丸長方形	396×(380)×44	(13.0)	N-108°-E		東壁	124 36×24×18	2	住27を切る。調査区外にかかる。
27	5	不明	《344》×《68》×40	《2.4》	不明				2	住26に切られる。調査区外にかかる。

第3表 建物址一覧

建物No.	図版No.	平面形 柱配り	主軸方向 面積 (m ²)	規模 (cm)	柱間寸法 (cm)	柱 穴				備考
						構成ピット	平面形	規模 (cm)	柱痕 (cm)	
6	6	方形 総柱式	N-3°-E 13	2間×2間 420×320	桁行 180~220 (200) 梁間 180~220 (200)	建6P1~9	円形	径 48~64 深 48~56		調査区域外にかかる。
7	6	方形 側柱式	N-12°-E 7.6	2間×1間 280×280	桁行 120~152 (136) 梁間 272~280 (276)	建7P1~6	円形	径 68~96 深 36~48	4基 径 20~24	調査区域外にかかる。
8	6	方形 側柱式	N-12°-E 《4.2》	1間×1間 172×220	桁行 220 梁間 172	建8P1~4	円形	径 72~84 深 44~48	2基 径 16~24	調査区域外にかかる。
9	6	長方形 側柱式	N-13°-E 《6.8》	2間×1間 272×248	桁行 120~148 (134) 梁間 248	建9P1~4	円形	径 56~64 深 32~48	2基 径 24~28	調査区域外にかかる。
10	6	長方形 側柱式	N-20°-E 《4.5》	1間×1間 204×212	桁行 212 梁間 204	建10P1~3	円形	径 68~80 深 52		住25に切られる。

第4表 土坑一覧

土坑No.	図版No.	平面形	規模 (cm) 長径×短径×深さ	備考	土坑No.	図版No.	平面形	規模 (cm) 長径×短径×深さ	備考
12	7	円形	84×72×36		22	7	楕円形	88×52×20	
13	7	楕円形	92×78×36		23	7	円形	68×68×44	住22を切る。
14	7	不明	48×《32》×32	区域外にかかる。	24	7	楕円形	88×60×48	住22を切る。
15	7	不明	124×《76》×54	区域外にかかる。	25	7			欠番
16	7	円形	52×52×12		26	7	楕円形	68×32×22	
17	7			建10 P 2	27	7	隅丸長方形	100×(64)×20	
18	7			建10 P 1	28	7	隅丸長方形	50×48×18	
19	7	楕円形	72×52×22		29	7	円形	76×72×38	住17を切る。
20	7	隅丸長方形	100×78×26		30	7	不整円形	88×72×32	
21	7	円形	100×90×36						

第5表 溝址一覧

溝址No.	方向(両端の中心を結んだ線を軸とした)	規模 (cm)			備考
		最大長	最大幅	最大深	
6	N-51°-E	696	124	35	区域外にかかる。
7	N-74°-W	716	94	24	住22に切られる。区域外にかかる。
8	N-85°-W	336	32	15	区域外にかかる。
9	N-8°-E	1140	76	12	住19を切る。住22、P110に切られる。区域外にかかる。
10	N-70°-W	568	94	23	区域外にかかる。
11	N-54°-E	152	38	18	区域外にかかる。

4 節 遺物

A 土器・土製品

今回の調査で出土した土器・陶器の種別は、弥生土器・土師器・須恵器がみられる。主体をなすのは古代の7世紀末～8世紀初頭の土師器・須恵器で、遺構に伴って出土している。弥生土器は遺構に伴って出土してはならず、検出面及び古代の遺構の覆土中より出土している。ここでは、各々を時期ごとに概観したい。なお、古代の土器群の分類・時期区分等については例言中に掲げた文献に従っている。本文中の括弧内の数字は本報告pp.27～35図版8～16中の実測図No.に対応する。

(1) 弥生土器

弥生土器は、今回の調査では遺構に伴って出土せず、古代の遺構の覆土中及び検出面から出土した。いずれも小片だが、摩滅していないものが多く、周辺に該期の遺構が存在する可能性が高い。時期的には弥生時代中期前半～中葉のものが主体を占め、中期後半以降のものが若干見られる。弥生時代中期前半の遺構・遺物は平田北遺跡を含め周辺の遺跡ではこれまで確認されておらず、貴重な所見が得られた。後期は近隣の出川南遺跡・出川西遺跡において集落が確認されており、これらと一連のものと考えることができよう。

中期前半～中葉の土器群（1～28）

出土量が少なく、器種構成の全体をうかがうことはできなかったが、壺・甕・無頸壺が確認できた。

壺（1～4・6～14・16・17） 胴部上半に最大径を持ち、頸部の長い形態のものか。9～11・14は沈線文を施文後、縄文を充填する。12・13もこうした壺か。6～8は地文を持たず、比較的細い沈線による文様が施文される。8は重四角連繫文となるものか。16・17は外面条痕調整の壺の肩部か。

甕（15・18～28） 最大径が口縁部にあり、口縁部が外反して開く形態をとる。器面調整は条痕文による。15は口縁部で、口唇に刻みがある。

無頸壺（5） 口縁部が内湾する小波状口縁の鉢。口縁部及び胴部の屈曲部以下に沈線文を施文。口縁部の文様は、波状部に二重の同心円文が施文され、その周囲に短沈線がめぐる。この同心円文を繋ぐように、波状部間は4条の平行沈線文と、その下に付随する連続した短沈線文が施文される。胴部は2条の平行する波状沈線文が施文される。

中期後半以降の土器群（29～37）

櫛書波状文を持つ甕（31～37）と、鉢（29）・壺（30）が見られる。櫛書波状文をもつ甕の中では、32は短い波状文が連続して施される櫛書短線文であり、後期でも前半にさかのぼりうるものであろう。29・30はともに赤彩が施されている。

(2) 古代の土器

今回の調査で主体をなす土器群で、大半が遺構に伴って出土している。時期的には古代1期～2期（7世紀末～8世紀初頭）にわたり、多くは2期に帰属するものである。2期としたものには、住居址の形態・主軸方向等から考えて、若干の時期差がある可能性がある。土器群の諸属性の定量的な分析により、こうした細かな時期差の有無・内容を明らかにできる可能性はあるが、今回は定性的な分析にとどまり、検討できなかった。各住居址からは多くの土器が出土しているが、住15・19・22などが量的にも多く、良好な資料である。出土した須恵器の中には、美濃須衛窯産・尾北窯産のものも見られ、注目される。以下、遺構ごとに概観したい。

第15号住居址出土土器群（48～102）

55点を図示。遺物は覆土中のほか、カマド周辺の床面付近から特にまとまって出土。総重量は23,365gを計

り、今回確認された住居址の中では出土量が最も多い。食器に須恵器坏A・B・坏蓋B、土師器坏D・E・高坏が、煮炊き具に土師器甕A・B・F・小型甕A・Bが、貯蔵具に須恵器甕A・短頸壺がある。須恵器坏A(61・62)の底部外面はヘラ切り未調整。須恵器坏Bはある程度安定して組成するようである。底部の確認できたものは、外面回転ヘラケズリによる。須恵器坏蓋Aは見られない。古墳時代以来の器種である土師器坏・高坏も安定して組成する。土師器甕はA・Bともにあるが甕Aの占める割合がまだ高い。64・65は美濃須衛窯産で、68・69もその可能性がある。また、91は畿内系の甕か。土師器坏Dが存在している点に古い要素が見られるものの、2期に帰属するものとする。

第17号住居址出土土器群(103～117)

15点を図示。遺物はカマド周辺や床面のほか、覆土中より出土しており、総重量は6,060gを計る。食器に土師器坏D・高坏・須恵器坏A・坏蓋Bが、煮炊き具に土師器甕A・Bがある。須恵器坏蓋Aは確認できなかった。103・105は美濃須衛窯産。土師器甕は、胴部外面ナデ調整の甕Aが主体を占める。甕Aは胴部最大径が中位より上にあり、口縁部の外反が強い。土器群は煮炊き具が主体を占め、全体の構成をうかがうことはできないものの、坏蓋Aの欠落・甕Aの器形から2期に帰属するものと考えたい。ただし、土師器坏Dの存在は古い要素である。

第18号住居址出土土器群

出土量が少なく、図示できなかった。遺物は覆土中より散漫に出土し、総重量は470g。帰属時期は不明。

第19号住居址出土土器群(126～162)

37点を図示。遺物は覆土中及び床面から出土している。総重量は9,720gを計る。食器に須恵器坏A・坏蓋B・高坏が、煮炊き具に土師器甕A・B・D・小型甕A・B・D・甌が、貯蔵具に須恵器甕A・長頸壺がある。須恵器坏A(134)の底部外面は回転ヘラケズリによる。須恵器坏蓋Bはいずれも端部が折れ曲がる形態のもの。坏蓋Aは確認できなかった。土師器甕は甕Bが卓越するようだが、甕Aも安定して組成している。甕A・Bとも口縁部は比較的長く、強く外反する。甕Dは外面がタタキ目の後カキ目調整で、内面には当具痕が残る。126・128・129・130・132・159は美濃須衛窯産と思われる。甕A・Bの特徴から2期に帰属するものと考えられる。

第20号住居址出土土器群(118・119)

出土点数が少なく、図示したのは2点のみ。遺物は覆土中より散漫に出土している。総重量は1,280gを計る。須恵器坏蓋Bと土師器甕Aがある。坏蓋B(118)は美濃須衛窯産か。帰属時期は判然としない。

第21号住居址出土土器群(38・39)

出土点数が少なく、2点を図示したのみ。遺物は覆土中より散漫に出土している。総重量は680gを計る。図示したのは、ともに須恵器坏である。帰属時期は判然としない。

第22号住居址出土土器群(163～185)

23点を図示。遺物は住居址中央付近の床面及び覆土中からまとまって出土している。総重量は10,980gを計る。食器に須恵器坏A・B・土師器坏D・高坏が、煮炊き具に土師器甕A・B・Fが、貯蔵具に須恵器甕A・鉢Aがある。須恵器坏A(165)は底部外面ヘラ切り未調整、坏B(166・167)は回転ヘラケズリによる。坏蓋Aは確認できなかった。土師器甕は器形のわかるものでは胴部最大径が口縁部直下であり、また口縁部は強く外反する。器種は甕A・Bとも安定して組成するようである。166は尾北窯産か。土師器坏Dの存在など古い要素も見られるが、土師器甕の特徴から2期に位置づけられるものか。

第23号住居址出土土器群(219～241)

23点を図示。遺物は床面からまとまって出土したほか、覆土中からも多く出土している。総重量は7,080gを計る。食器に須恵器坏A・B・坏蓋A・B・土師器坏D・高坏が、煮炊き具に土師器甕A・B・F・小型甕

Bがある。須恵器坏Aの外傾指数は60～73。坏Aの底部外面はヘラ切り未調整、坏Bは回転ヘラケズリによる。土師器甕は、ナデ調整の甕Aが主体を占めるようである。甕の口縁部は比較的長く、外反する。225は美濃須衛窯産である。坏蓋A・坏Dの存在および土師器甕の主体を甕Aが占める点から1期に帰属すると考えられる。

第24号住居址出土土器群（207～209）

3点を図示。遺構の大半が住19に切られていたため、遺物出土量は少ないが、カマド周辺からまとまって出土している。総重量は1,260gを計る。須恵器坏及び土師器甕Bがある。坏の底部付近の外面調整は回転ヘラケズリによる。帰属時期は判然としない。

第25号住居址出土土器群（197～206）

10点を図示。図示したものの多くはカマド内からまとまって出土したものである。総重量は4,780gを計る。食器に須恵器坏蓋B・高坏が、煮炊き具に土師器甕A・B・小型甕がある。198は美濃須衛窯産。器種構成の全体がうかがえず、帰属時期も詳細は不明であるが、1～2期に位置づけられようか。

第26号住居址出土土器群（186～196）

11点を図示。遺構の一部が調査区外にかかっており、出土量はそれほど多くない。総重量は4,090gを計る。食器に須恵器坏B・坏蓋Bが、煮炊き具に土師器甕A・B・小型甕がある。須恵器坏Bの高台はやや中寄に付き、外に開き気味の断面平行四辺形のものである。底部外面は回転ヘラケズリによる。186は美濃須衛窯産と思われる。土師器甕は長胴の形態で、口縁部は長く、強く外反する。以上の特徴から2期に位置づけられるものと考えられる。

第27号住居址出土土器群（120～125）

6点を図示。遺物は覆土中より散漫に出土。総重量は1,830gを計る。食器に須恵器坏Aが、煮炊き具に甕Aがある。須恵器坏Aの120の底部外面はヘラ切り、123は回転ヘラケズリか。点数が少なく、土器群全体の構成がうかがえないが、2期あたりに帰属するものであろうか。

その他の遺構出土土器群

図示しえた遺物が出土した遺構として溝6（210）・土4（40）・9（217）・50（216）・52（218）・54（215）がある。215は美濃須衛窯産である。図示しなかったが建6からも須恵器長頸壺・土師器甕Aが出土している。いずれも住居跡の帰属時期である1～2期のものとしても違和感はなく、帰属時期もこのあたりに考えておきたい。

(3) 土製品

轆の羽口が住19・住26より出土しており、3点を図示した。実測図では熔滓付着部分をスクリーントーン、その下の器面が灰色に変色している部分の範囲を破線で表現した。242・243が住19、244が住26出土。住19からはほかに破片が出土しており、鍛冶炉が2基確認されている。図示した3点はいずれも内外面をナデ調整しているが、243は指頭ナデ、244は工具ナデが観察できる。244は先端に熔滓が付着している。重量は242が155g、243が335g、244が305g。住19の破片資料の総重量は180gである。

B 石器

本遺跡では実測図を掲載した砥石状石器以外に、前述した主に粗質石材を素材とした、主にカマド構築材と考えられる広義の石器群と、弥生時代に帰属すると考えられる、主に緻密石材を素材とした石器群の一部を回収した。砥石状石器の属性は各実測図の下部に記し、弥生時代に帰属すると考えられる石器群の属性のみを一覧表化した（第6表、p.36図版17）。同石器群は奈良時代に帰属する遺構群の発掘作業中に、同遺構群の主に

覆土中から回収したが、本調査で設定した遺構検出面の直下に位置し、少量の弥生時代遺物を包含する区層(p.4 第2図参照)から混入したと考える。

第6表 石器属性一覧

ID	出土遺構1	出土遺構2	器種	重量	石材略号	接合	備考	ID	出土遺構1	出土遺構2	器種	重量	石材略号	接合	備考
1	住17	SW	RF	0.5	Ob	×		15	住21	覆土	F	0.8	Ob	×	
2	住19	NE	C	11.4	Ob	×		16	住22	貼床	MF	1.2	Ob	×	
3	住19	NE	F	2	Ob	×		17	住22	ベルトN	MF	0.2	Ob	×	
4	住19	NE	F	0.4	Ob	×		18	住22	ベルトN	C	5.7	Ob	×	
5	住19	NE	F	0.5	Ob	×		19	住23	カマド	F	1	Ob	×	
6	住19	NE	F	0.9	Ob	×		20	住24	No.3	MF	0.7	Ob	×	
7	住19	NE	C	5	Ch	×		21	住26	W	MS	41.4	Ob	×	
8	住19	SW	FP	2.9	Ob	×		22	住26	P5	C	8.1	Ob	×	
9	住19	SW	F	0.7	Ob	×		23	住27	覆土	MF	2.6	Ob	×	
10	住19	NW	F	2.9	Ob	×		24	建6	P7	C	31.2	Ob	×	
11	住19	覆土	BC	10.2	FGHSa	×		25	土6	-	F	1.2	Ob	×	
12	住20	SE	BC	8.7	Ob	×		26	P54	-	C	43.8	Ob	×	
13	住20	トレンチ(床下)	F	0.3	Ob	×		27	排土	-	F	0.4	Ob	×	
14	住20	トレンチ(床下)	F	0.3	Ob	×									

(MS:原石, C:石核, BC:楔状石核, F:剥片, RF:二次加工のある剥片, MF:微細剥離痕のある剥片, FP:打製鐵形石器)

(Ch:チャート, FGHSa:細粒硬砂岩, Ob:黒曜岩)

石器分類は(太田 1998)、(太田 2000)で仮設されたものを用いたので参照して頂きたい。

太田圭郁 1998 「②石器・石製品」『境窪遺跡・川西開田遺跡Ⅰ・Ⅱ』 松本市教育委員会

太田圭郁 2000 「4.石器」『平瀬遺跡Ⅱ』 松本市教育委員会

C 金属器

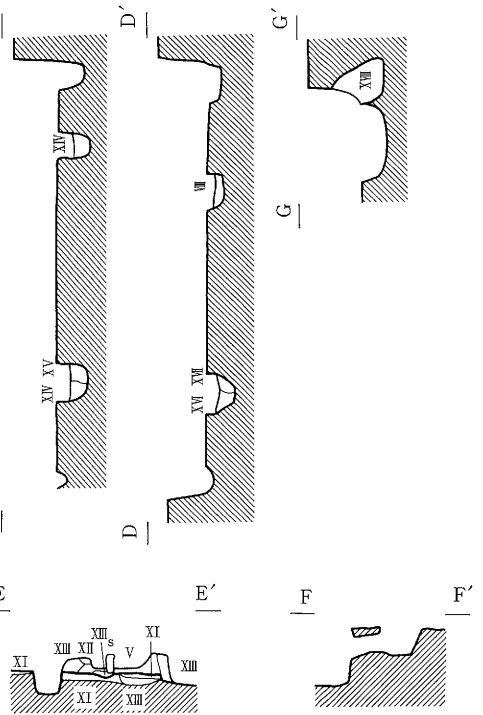
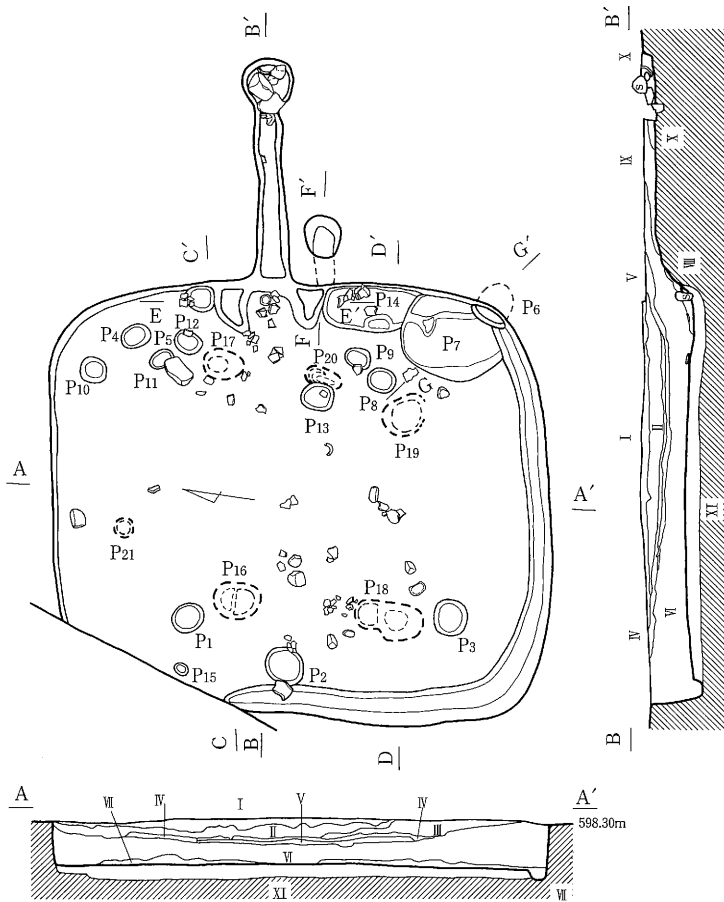
総計75点出土し、5点を図示した(p.36図版17)。材質は全て鉄である。器種と各点数は鎌(1)、刀子(1)、釘(6)、鉄滓(67)で鉄滓が全体数の約89%を占める。67点中、4点の鉄滓は椀状を呈する。

第7表 金属器属性一覧

遺物I.D.	図版No.	出土遺構1	出土遺構2	器種	重量(g)	備考	遺物I.D.	図版No.	出土遺構1	出土遺構2	器種	重量(g)	備考
1		住15	北東	鉄滓	21.73	椀状	39		住19	ピット8	鉄滓	0.1	椀状
2		住15	南西	鉄滓	9.28		40		住19	ピット9	鉄滓	4.45	76×16×7
3		住17	北東	鉄滓	112.19	椀状	41		住19	ピット9	鉄滓	1.59	
4		住17	南東	鉄滓	13		42		住19	ピット9	鉄滓	0.61	
5		住17	南東	鉄滓	6.09		43		住21	覆土	鉄滓	29.1	
6		住17	南東	鉄滓	5.89		44	17	住22	No.29	刀子	11.27	56×7×5
7		住17	南東	鉄滓	1.4		45		住23	北	鉄滓	7.31	22×9×6
8		住17	南東	鉄滓	0.68		46		住23	北	鉄滓	6.65	31×7×5
9		住17	南東	鉄滓	0.67		47		住23	南	鉄滓	5.43	
10		住17	北西	鉄滓	6.14		48	17	住23	No.1	釘	2.66	
11		住17	ベルト東	鉄滓	5.45		49		住23	No.2	釘	1.83	
12		住17	ベルト西	鉄滓	50.43	椀状	50	17	住23	No.2	釘	1.61	26×7×4
13		住17	ベルト西	鉄滓	10.6		51		住23	No.10	鉄滓	7.49	18×2×2
14	17	住19	南西	釘	3.3	52×6×5	52		住26	西	鉄滓	11.32	
15		住19	No.10	鉄滓	10.85		53		住26	ピット1	鉄滓	1.72	
16		住19	No.10	鉄滓	2.76		54		住26	ピット2	釘	2.24	
17		住19	No.10	鉄滓	2.69		55		住26	ピット2	釘	0.8	
18		住19	No.10	鉄滓	0.26		56		住26	ピット2	鉄滓	18.51	
19	17	住19	No.15	鎌	33.7	126×32×4	57		住26	ピット2	鉄滓	9.8	
20		住19	ピット8	鉄滓	13.28		58		住26	ピット2	鉄滓	9.61	
21		住19	ピット8	鉄滓	7.78		59		住26	ピット2	鉄滓	6.21	
22		住19	ピット8	鉄滓	6.83		60		住26	ピット2	鉄滓	5.34	
23		住19	ピット8	鉄滓	5.87		61		住26	ピット2	鉄滓	5.14	
24		住19	ピット8	鉄滓	3.28		62		住26	ピット2	鉄滓	3.57	
25		住19	ピット8	鉄滓	3.14		63		住26	ピット2	鉄滓	2.57	
26		住19	ピット8	鉄滓	3.12		64		住26	ピット2	鉄滓	2.16	
27		住19	ピット8	鉄滓	3.04		65		住26	ピット2	鉄滓	2.06	
28		住19	ピット8	鉄滓	2.95		66		住26	ピット2	鉄滓	1.54	
29		住19	ピット8	鉄滓	2.3		67		住26	ピット2	鉄滓	1.42	
30		住19	ピット8	鉄滓	0.89		68		住26	ピット2	鉄滓	1.37	
31		住19	ピット8	鉄滓	0.88		69		住26	ピット2	鉄滓	1.21	
32		住19	ピット8	鉄滓	0.82		70		住26	ピット2	鉄滓	0.82	
33		住19	ピット8	鉄滓	0.64		71		住26	ピット2	鉄滓	0.72	
34		住19	ピット8	鉄滓	0.61		72		住26	ピット2	鉄滓	0.66	
35		住19	ピット8	鉄滓	0.55		73		住26	ピット3	鉄滓	14.33	
36		住19	ピット8	鉄滓	0.44		74		P54	覆土	鉄滓	5.6	
37		住19	ピット8	鉄滓	0.16		75		グリッド	S6W3	鉄滓	12.87	
38		住19	ピット8	鉄滓	0.12								

(所謂定型的な金属器の量法は備考欄にmm単位で記し、鉄滓は重量のみを記した。回収した金属器中、磁石に反応し、人為的意図的整形痕跡の見られないものを鉄滓とした。)

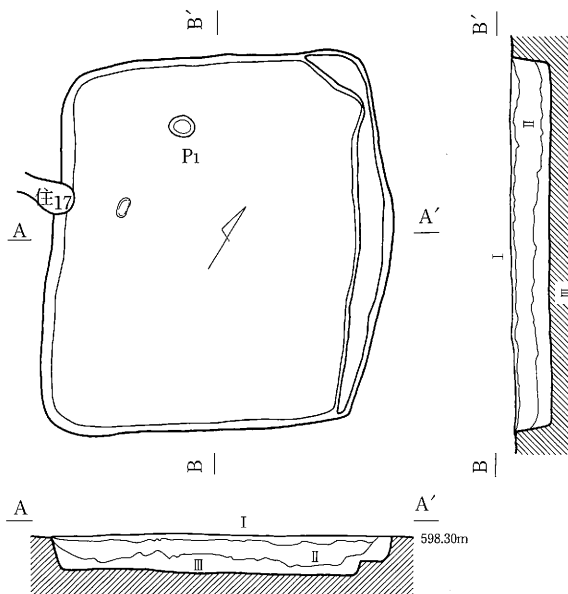
第15号住居址



第15号住居址

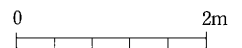
- I : 暗黄灰色土(鉄分沈殿)
- II : 暗黄灰色土(鉄分微量沈殿)
- III : 暗黄灰色土(鉄分沈殿 Iに似る)
- IV : 暗黄灰色土(炭化物粒少量、焼土塊多量混入)
- V : 暗黄灰色土(炭化物粒、焼土粒少量混入)
- VI : 灰褐色土(炭化物粒微量、灰土粒少量混入)
- VII : 灰褐色土(灰土粒多量混入)
- VIII : 灰褐色土(炭化物粒、焼土粒少量混入)
- IX : 灰褐色土(やや砂質、炭化物粒微量、焼土粒少量混入)
- X : 暗灰褐色土(炭化物粒、焼土粒少量混入)
- XI : 黄灰色土(小礫、炭化物粒、焼土粒少量、灰褐色土塊多量混入 貼床)
- XII : 焼土層
- XIII : 暗黄灰色土(炭化物粒、焼土塊混入、焼土粒少量混入)
- XIV : 暗黄灰色土(炭化物粒少量混入)
- XV : 黄灰色土(小礫多量混入)
- XVI : 灰褐色土(小礫微量混入)
- XVII : 灰褐色土(小礫多量混入)
- XVIII : 灰褐色土(黄灰色土塊微量混入)

第18号住居址



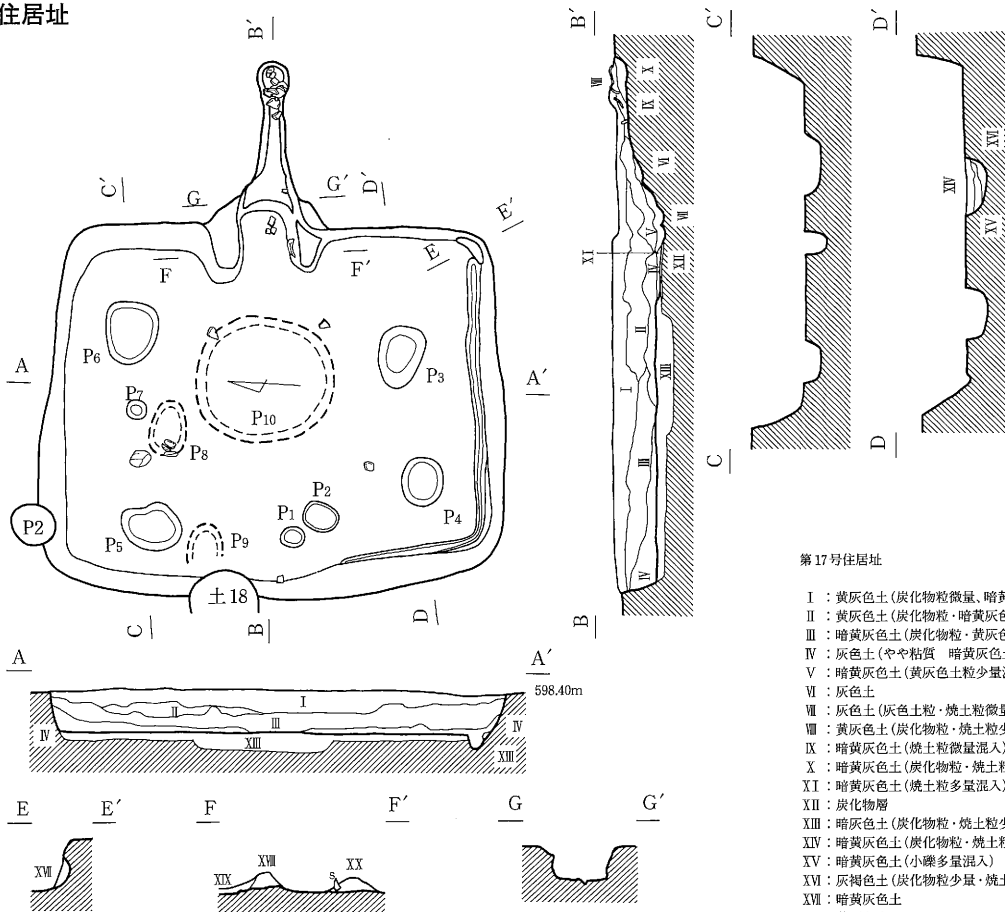
第18号住居址

- I : 暗黄灰色土(灰褐色土粒少量混入 鉄分沈殿)
- II : 暗黄灰色土(灰褐色土粒多量混入)
- III : 黄灰色土(炭化物粒微量混入 鉄分沈殿)



図版1 住居址(1)

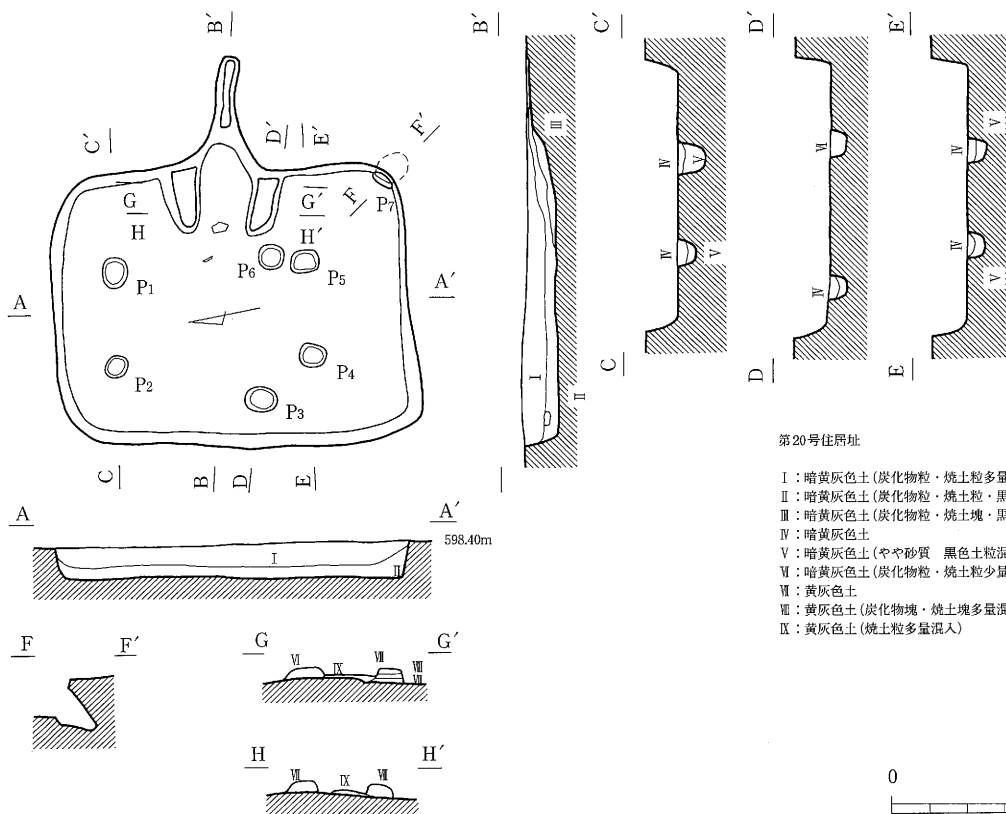
第17号住居址



第17号住居址

- I : 黄灰色土(炭化物粒微量,暗黄灰色土块少量混入 铁分沈殿)
- II : 黄灰色土(炭化物粒,暗黄灰色土块微量混入 铁分沈殿)
- III : 暗黄灰色土(炭化物粒,黄灰色土块微量,灰色土块多量混入)
- IV : 灰色土(やや粘質 暗黄灰色土粒微量混入)
- V : 暗黄灰色土(黄灰色土粒少量混入)
- VI : 灰色土
- VII : 灰色土(灰色土粒,烧土粒微量混入)
- VIII : 黄灰色土(炭化物粒,烧土粒少量混入)
- IX : 暗黄灰色土(烧土粒微量混入)
- X : 暗黄灰色土(炭化物粒,烧土粒微量混入)
- XI : 暗黄灰色土(烧土粒多量混入)
- XII : 炭化物層
- XIII : 暗灰色土(炭化物粒,烧土粒少量混入)
- XIV : 暗黄灰色土(炭化物粒,烧土粒多量混入)
- XV : 暗黄灰色土(小礫多量混入)
- XVI : 灰褐色土(炭化物粒少量,烧土粒微量混入)
- XVII : 暗黄灰色土
- XVIII : 黄灰色土
- XIX : 暗灰褐色土
- XX : 暗黄灰色土(褐色土粒少量混入)

第20号住居址



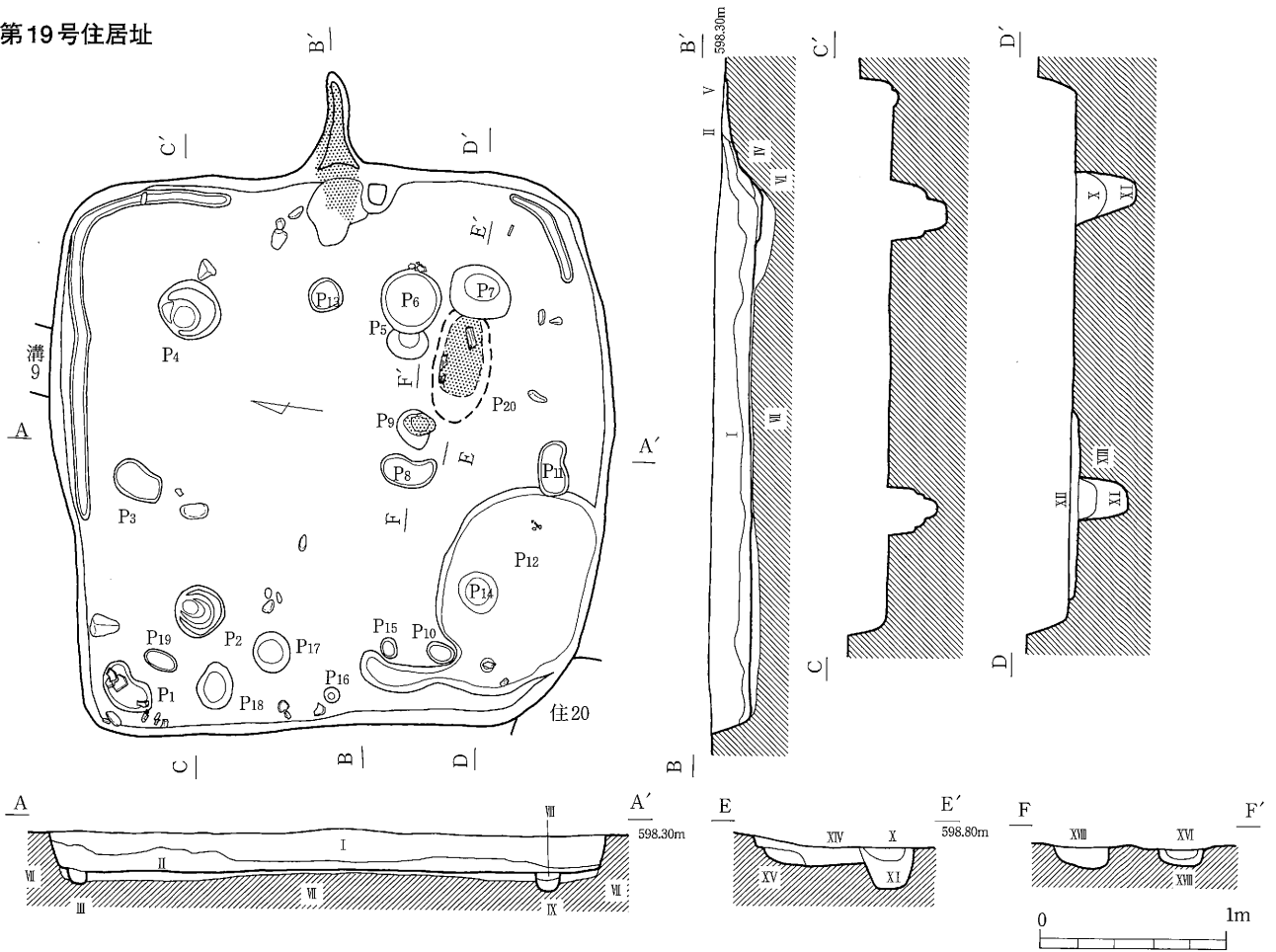
第20号住居址

- I : 暗黄灰色土(炭化物粒,烧土粒多量混入)
- II : 暗黄灰色土(炭化物粒,烧土粒,黑色土粒少量混入)
- III : 暗黄灰色土(炭化物粒,烧土块,黑色土粒少量混入)
- IV : 暗黄灰色土
- V : 暗黄灰色土(やや砂質 黑色土粒混入)
- VI : 暗黄灰色土(炭化物粒,烧土粒少量,烧土块混入)
- VII : 黄灰色土
- VIII : 黄灰色土(炭化物塊,烧土塊多量混入)
- IX : 黄灰色土(烧土粒多量混入)



图版2 住居址(2)

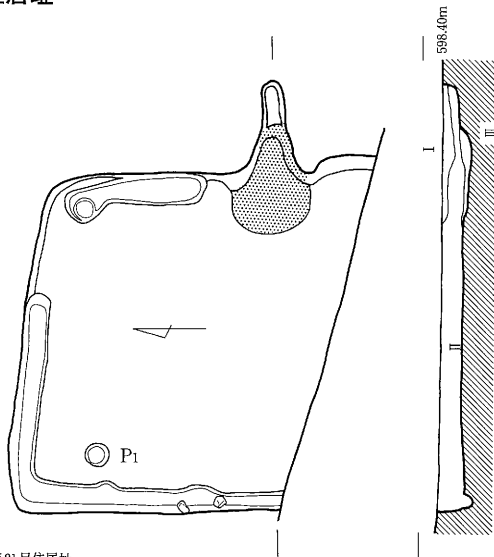
第19号住居址



第19号住居址

- I : 暗黄灰色土(炭化物粒·暗灰色土塊少量混入 鉄分沈殿)
- II : 暗黄灰色土(炭化物粒·黑色土粒·暗灰色塊少量混入)
- III : 暗黄色土(暗灰色土粒少量混入)
- IV : 暗灰色土(炭化物粒微量·燒土粒少量混入)
- V : 暗灰色土(炭化物粒微量·燒土粒少量混入)
- VI : 暗灰色土(炭化物粒微量·燒土粒少量混入)
- VII : 暗黄褐色土(小礫·炭化物粒·燒土粒·灰褐色土塊少量混入)
- VIII : 灰褐色土(黄灰色土粒少量混入)
- IX : 灰褐色土(砂や砂質)
- X : 暗黄褐色土(小礫少量混入)
- XI : 暗黄褐色土(小礫·灰褐色土塊少量混入)
- XII : 灰褐色土(礫·炭化物粒·燒土粒少量混入)
- XIII : 灰褐色土(礫少量混入)
- XIV : 暗黄褐色土(炭化物粒少量混入)
- XV : 暗黄褐色土(炭化物粒少量·灰褐色土塊少量混入)
- XVI : 黄灰色土(炭化物粒微量混入)
- XVII : 黄灰色土(炭化物粒少量·燒土粒少量混入)
- XVIII : 暗黄灰色土(炭化物粒·燒土粒少量混入)

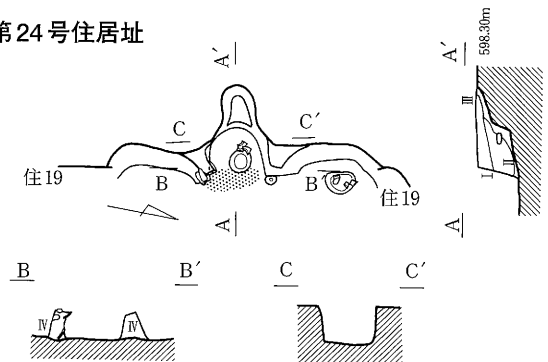
第21号住居址



第21号住居址

- I : 暗黄褐色土(黄色土粒少量混入)
- II : 暗黄褐色土(炭化物粒·灰褐色土塊少量混入)
- III : 暗黄褐色土(炭化物粒·燒土粒·黑色土粒少量混入)

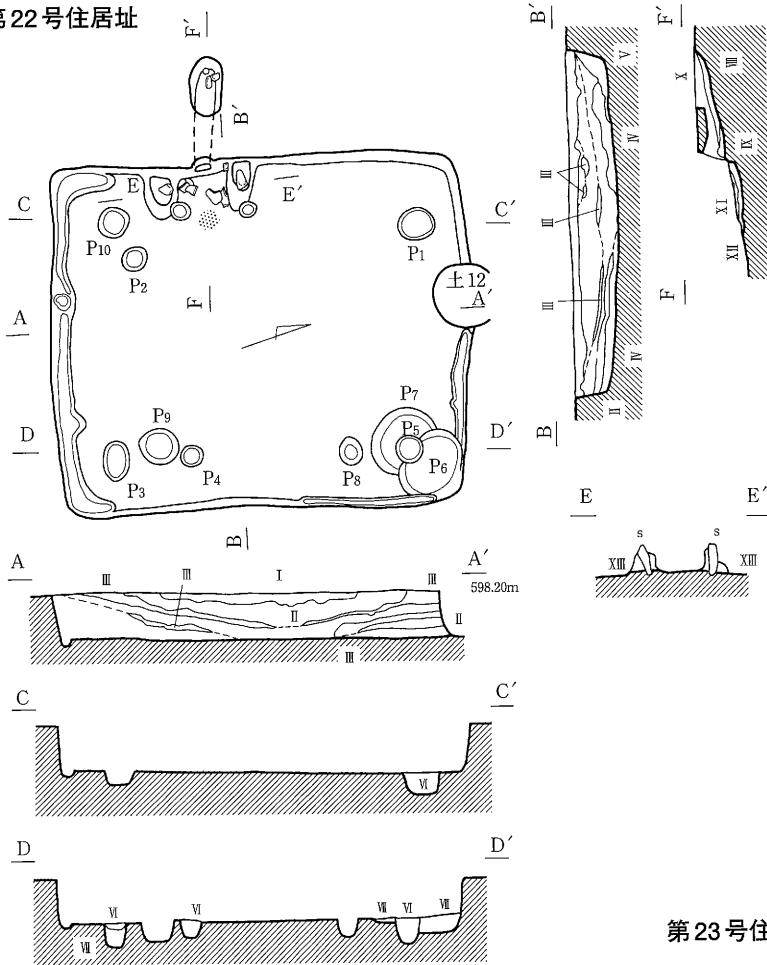
第24号住居址



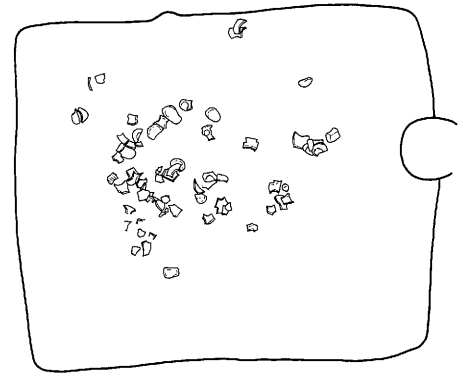
第24号住居址

- I : 暗黄褐色土(黄色土粒少量混入)
- II : 暗黄褐色土(炭化物粒·灰褐色土塊少量混入)
- III : 暗黄褐色土(炭化物粒·燒土粒·黑色土粒少量混入)

第22号住居址



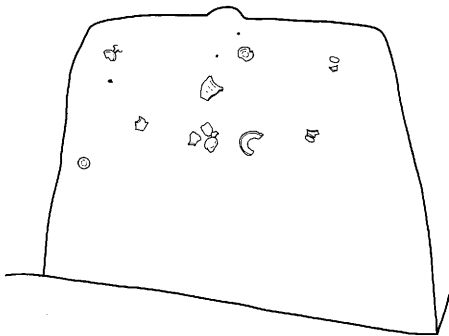
22住遺物出土状況



第22号住居址

- I : 黄灰色土(鉄分沈殿)
- II : 灰褐色土(黄灰色土塊少量混入)
- III : 黄灰色土(灰褐色土塊少量混入)
- IV : 暗黄灰色土(灰色土粒少量混入 鉄分微量沈殿)
- V : 暗黄灰色土(炭化物粒・焼土塊微量混入)
- VI : 暗黄灰色土
- VII : 暗灰色土
- VIII : 暗黄灰色土(焼土粒少量混入)
- IX : 暗黄灰色土(焼土粒少量混入)
- X : 暗黄灰色土(焼土粒微量混入)
- XI : 暗黄灰色土(炭化物粒少量・焼土塊多量混入)
- XII : 暗黄灰色土(炭化物粒微量・焼土塊少量混入)
- XIII : 黄灰色土(灰褐色土塊少量混入)

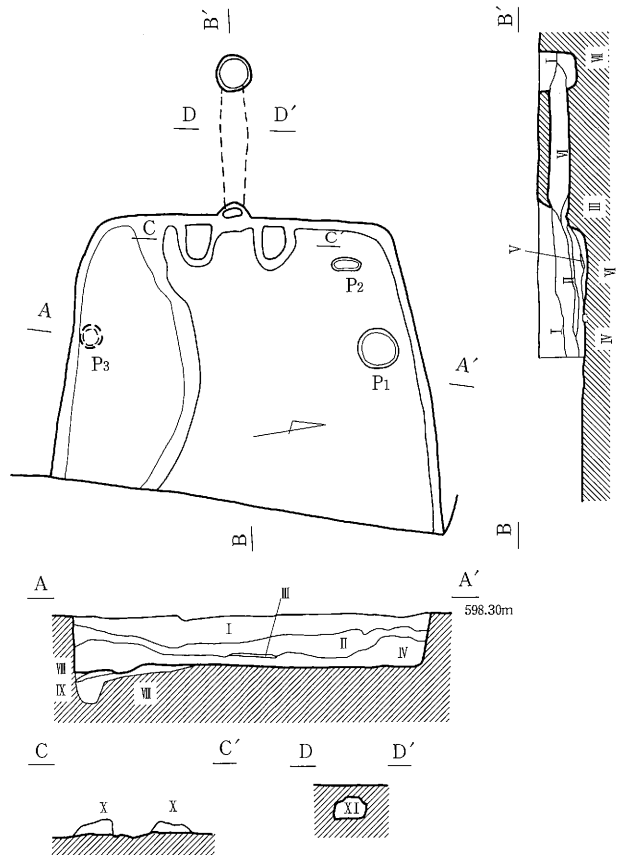
第23住遺物出土状況



第23号住居址

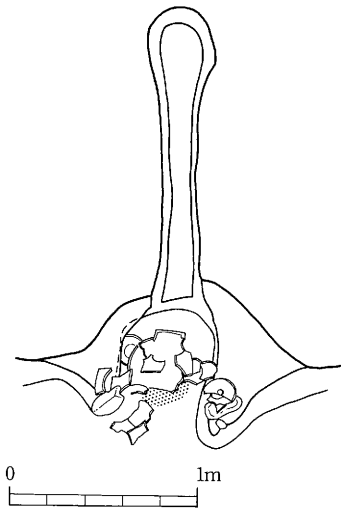
- I : 暗黄灰色土(炭化物粒・黑色土粒少量混入 鉄分沈殿)
- II : 暗黄灰色土(炭化物粒・黑色土粒少量混入)
- III : 暗黄灰色土(炭化物粒・焼土粒少量)
- IV : 暗黄灰色土
- V : 暗黄灰色土(炭化物粒・焼土粒少量混入)
- VI : 暗黄灰色土(炭化物粒少量・焼土粒・焼土塊多量混入)
- VII : 暗黄灰色土(炭化物粒少量・焼土粒少量・焼土塊多量混入)
- VIII : 黄灰色土(黑色土粒少量混入)
- IX : 暗黄灰色土(黑色土粒多量混入)
- X : 暗黄褐色土(焼土塊・灰色土塊少量混入)
- XI : 暗灰褐色土(炭化物粒・焼土塊少量混入)

第23号住居址



図版4 住居址(4)

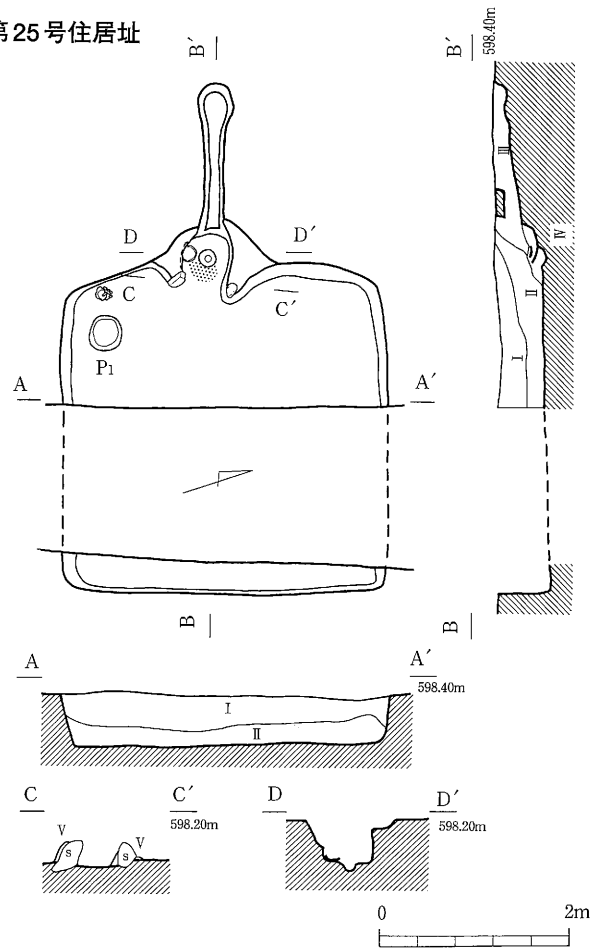
第25号住居址カマド遺物出土状況



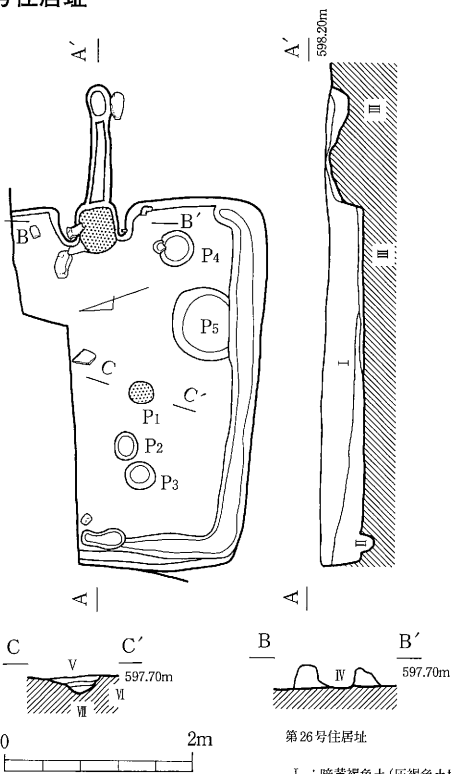
第25号住居址

- I : 暗黄灰色土(鉄分少量沈殿)
- II : 暗黄灰色土(灰色土塊多量混入)
- III : 暗黄灰色土(炭化物粒少量、灰色土塊多量混入)
- IV : 暗黄灰色土(焼土塊多量混入)
- V : 暗黄灰色土(炭化物粒・焼土粒少量混入)

第25号住居址



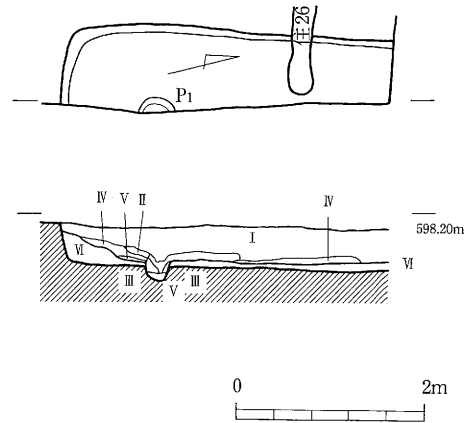
第26号住居址



第26号住居址

- I : 暗黄褐色土(灰褐色土塊多量混入)
- II : 暗黄褐色土(灰色土塊多量混入)
- III : 暗黄褐色土(炭化物粒少量、灰色土塊多量混入)
- IV : 暗黄褐色土(炭化物粒・焼土塊少量混入)
- V : 灰褐色土
- VI : 被熱黒化層
- VII : 被熱赤化層

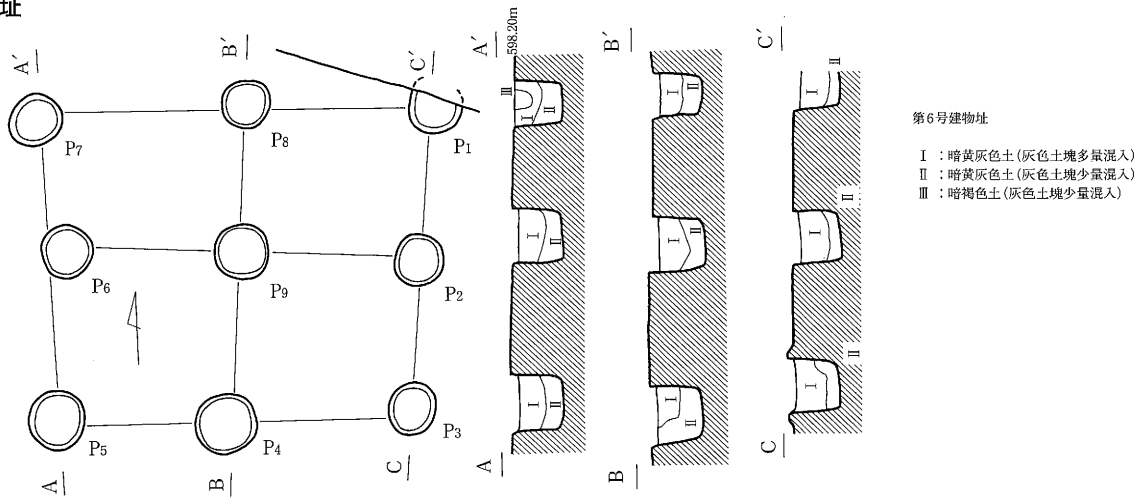
第27号住居址



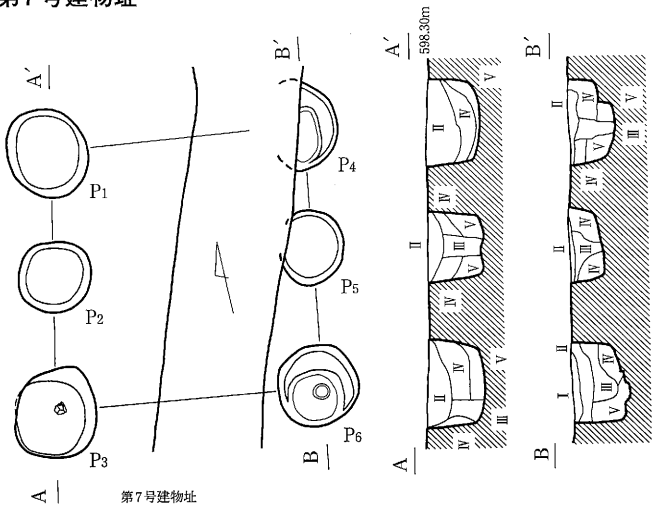
第27号住居址

- I : 暗黄褐色土(小礫・炭化物粒少量混入 鉄分微量沈殿)
- II : 暗黄褐色土(焼土粒・焼土塊多量混入)
- III : 暗黄褐色土(炭化物粒多量混入)
- IV : 暗黄褐色土(焼土粒・焼土塊少量混入)
- V : 暗黄褐色土(炭化物粒・焼土塊・茶褐色土塊少量混入)
- VI : 暗黄褐色土(炭化物粒少量混入)

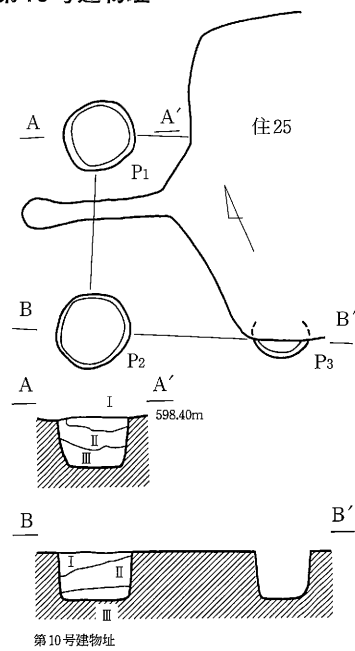
第6号建物址



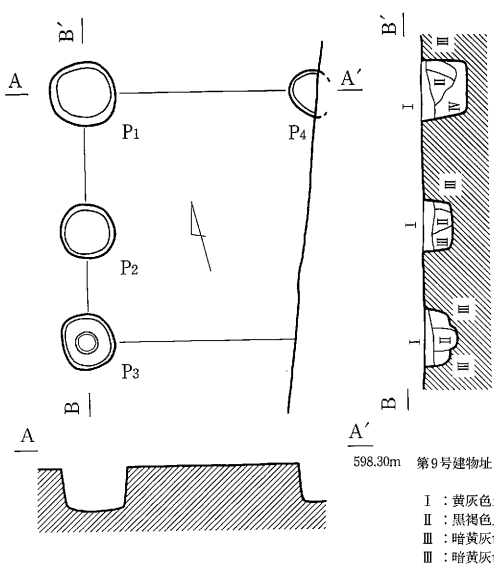
第7号建物址



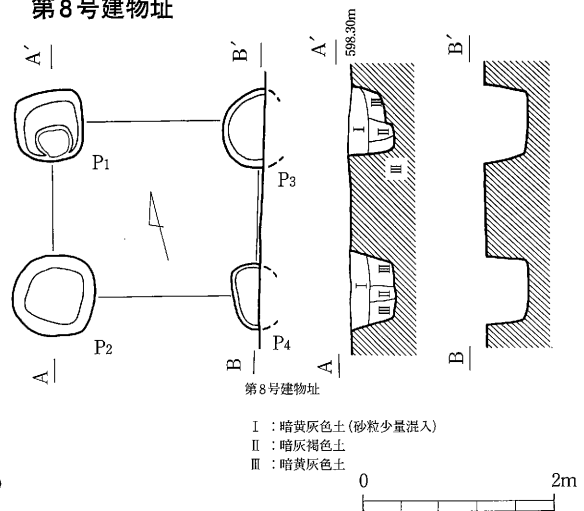
第10号建物址



第9号建物址

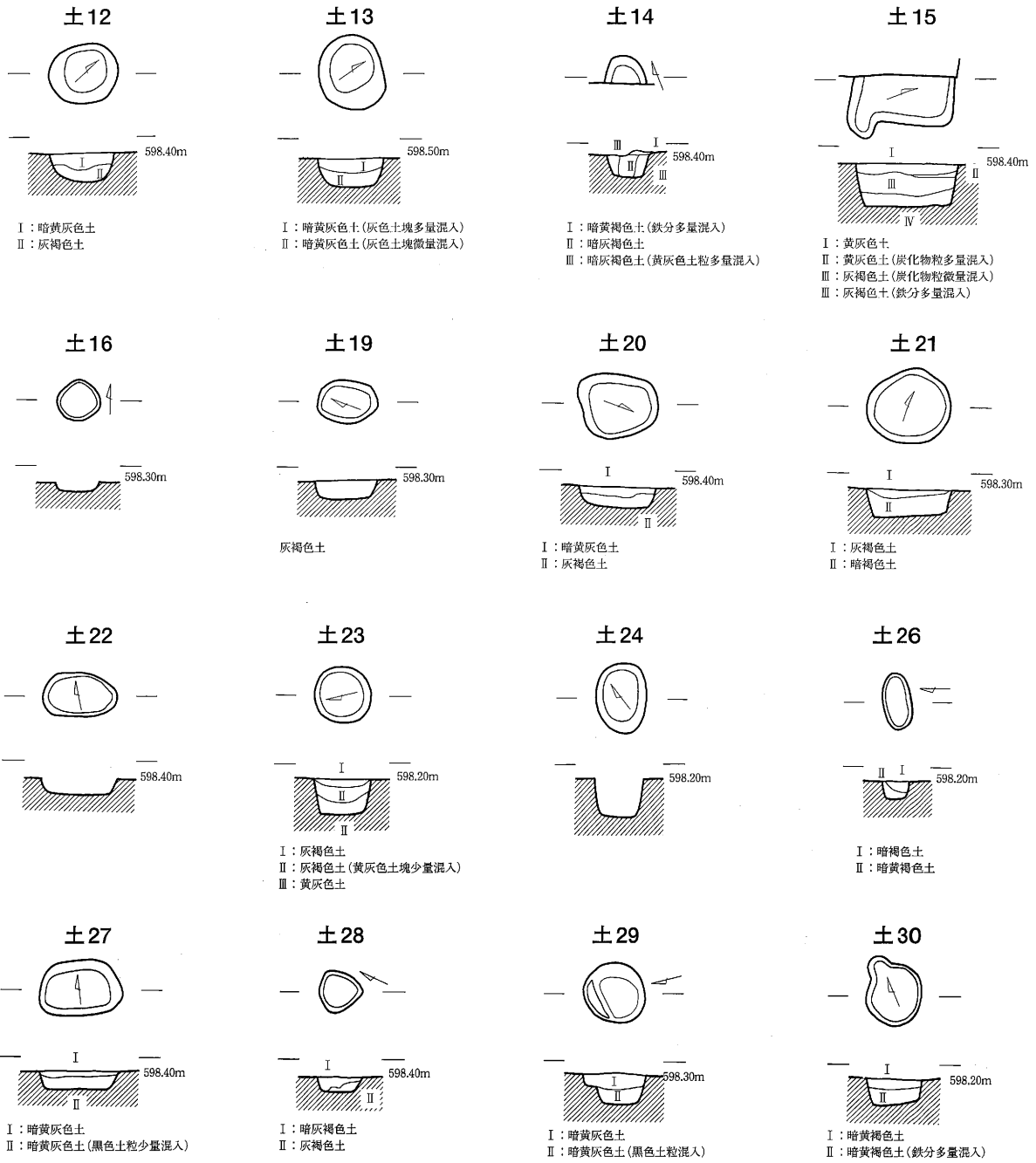


第8号建物址

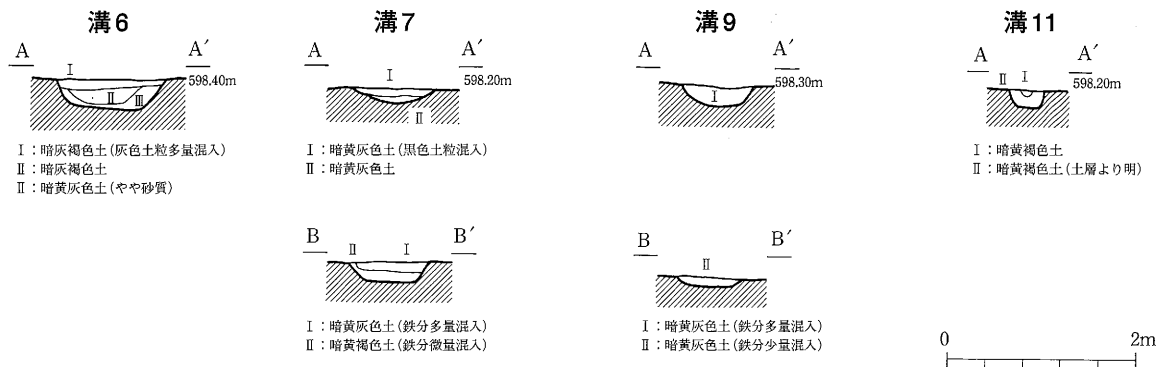


図版6 建物址

土坑

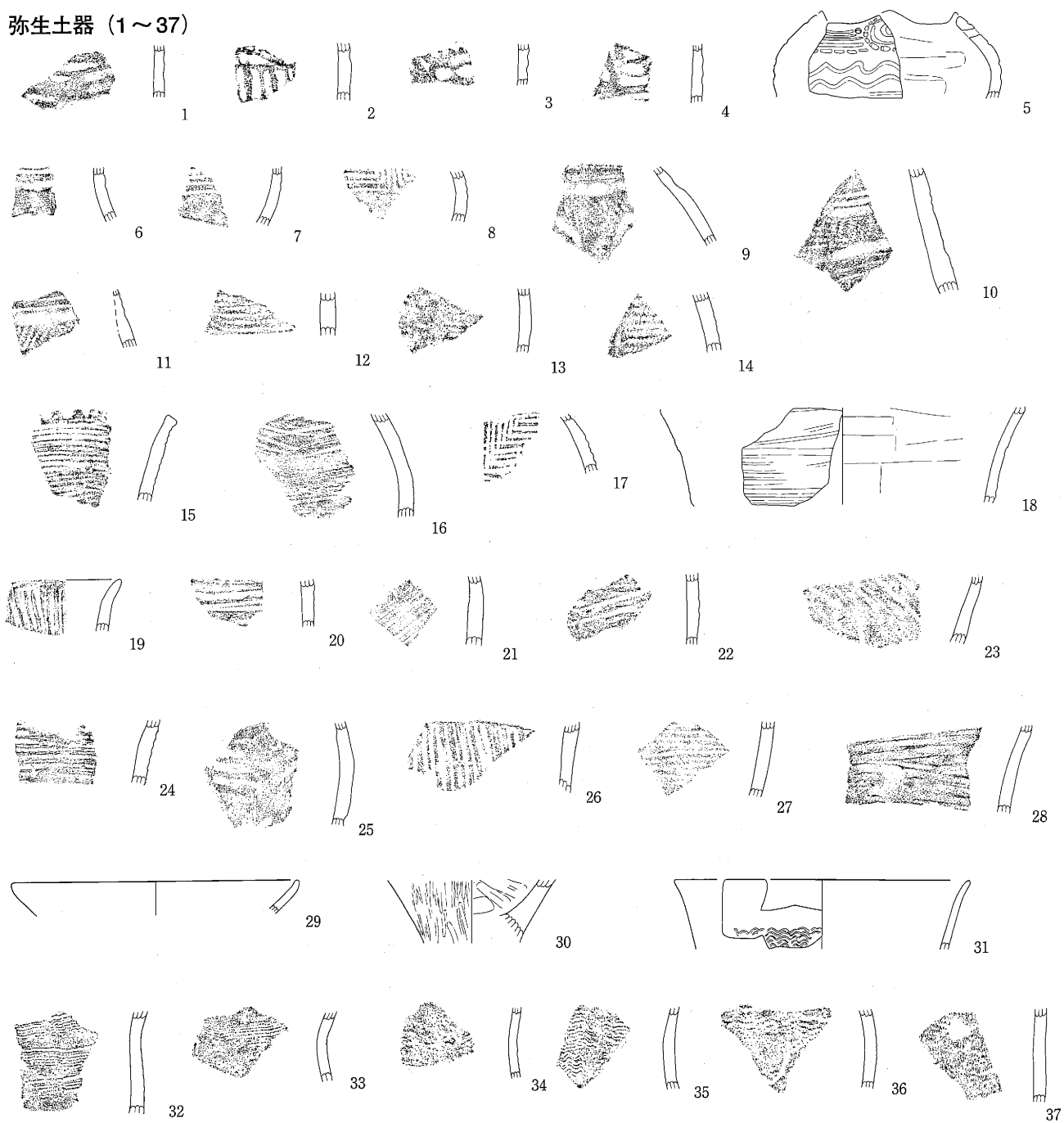


溝址



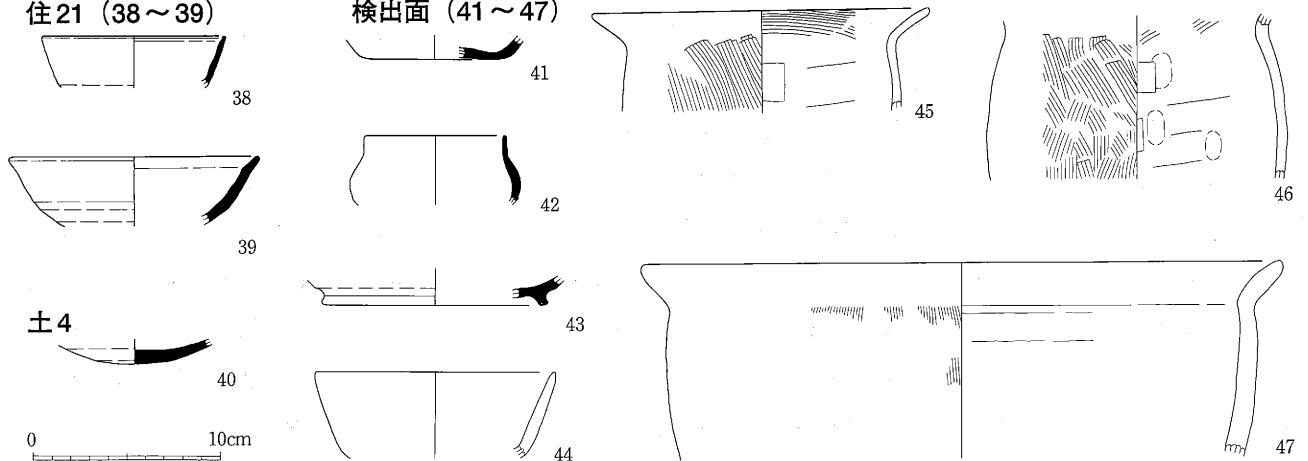
図版7 土坑、溝址

弥生土器 (1~37)



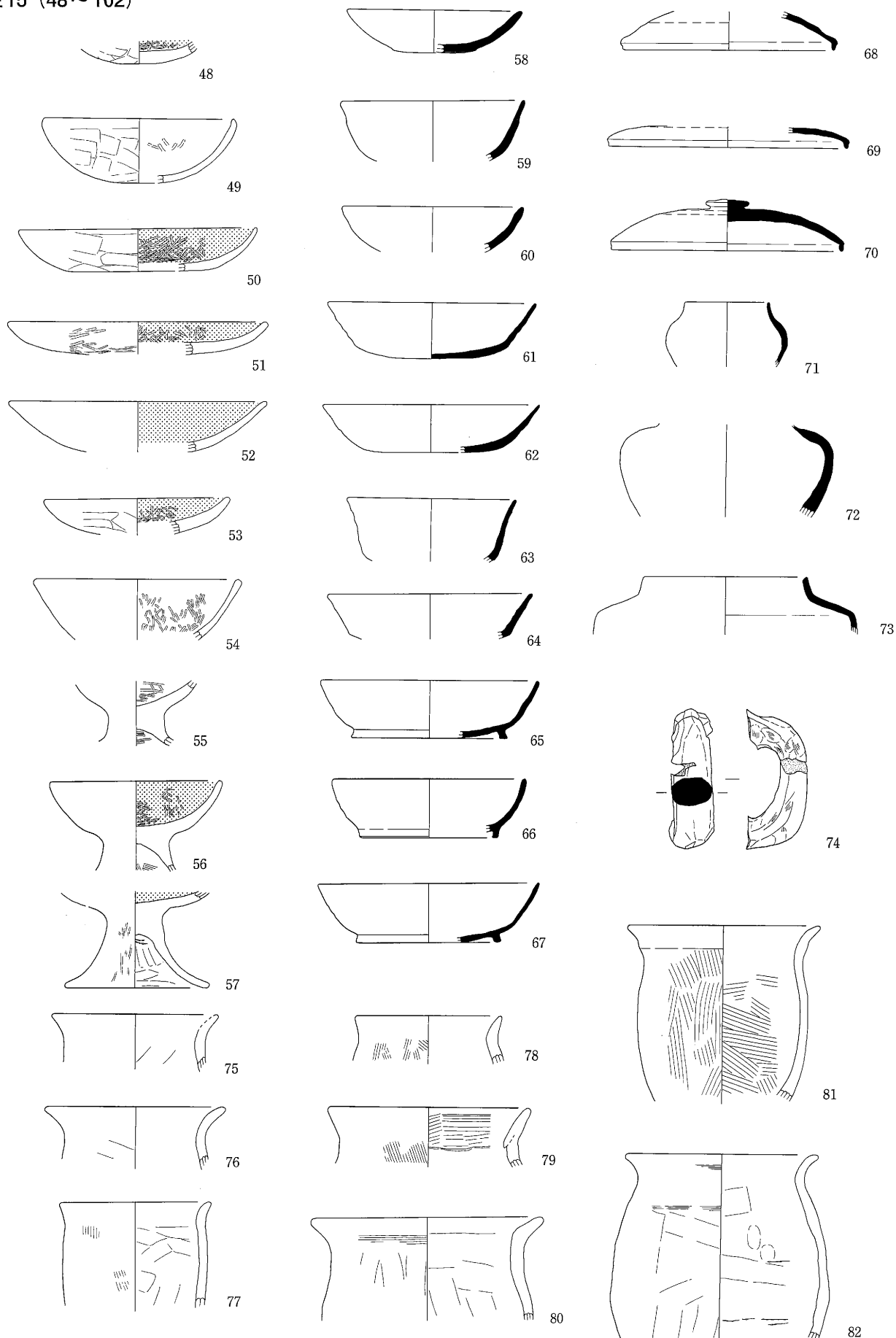
住 21 (38~39)

検出面 (41~47)



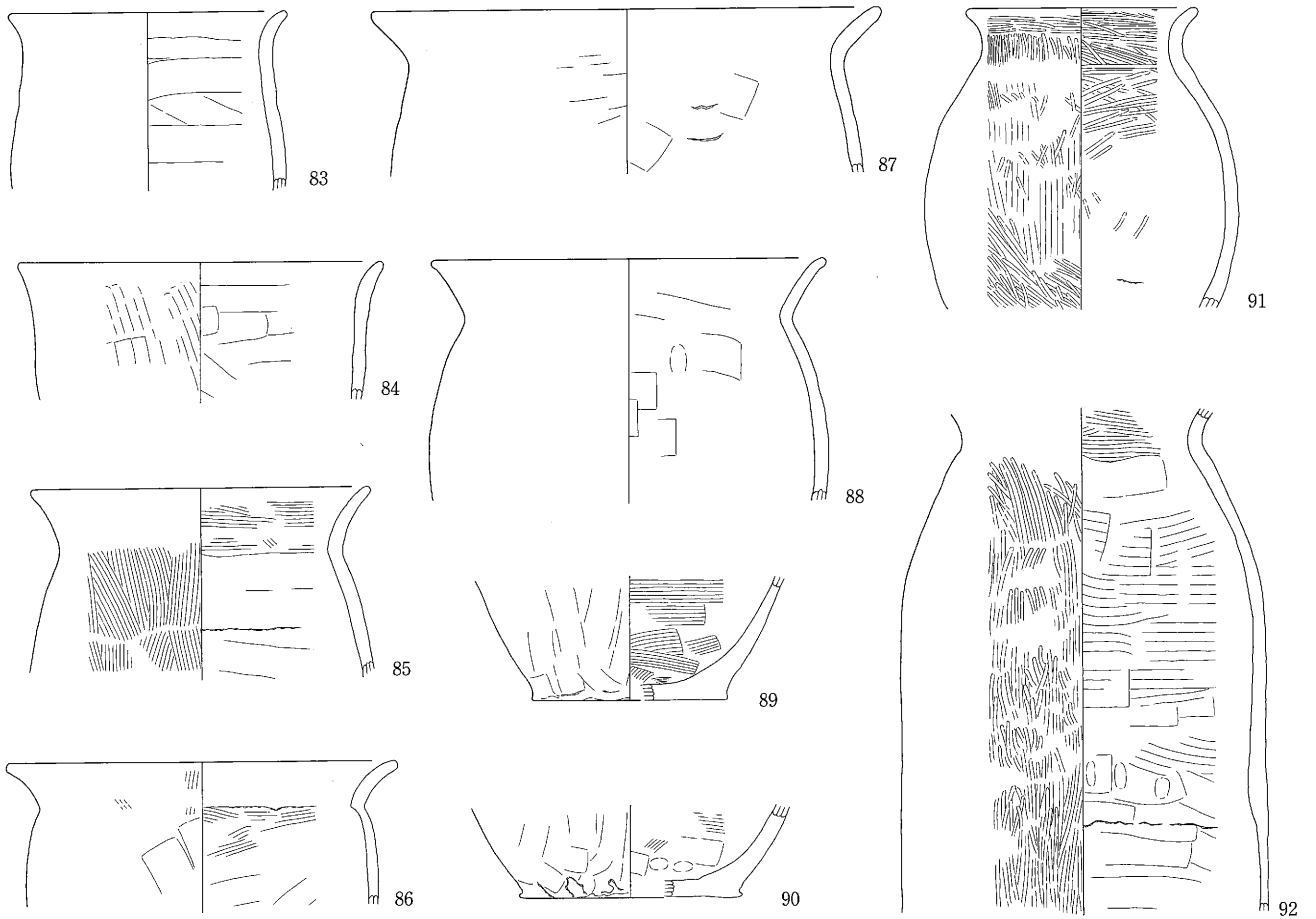
図版 8 土器(1)

住15 (48~102)



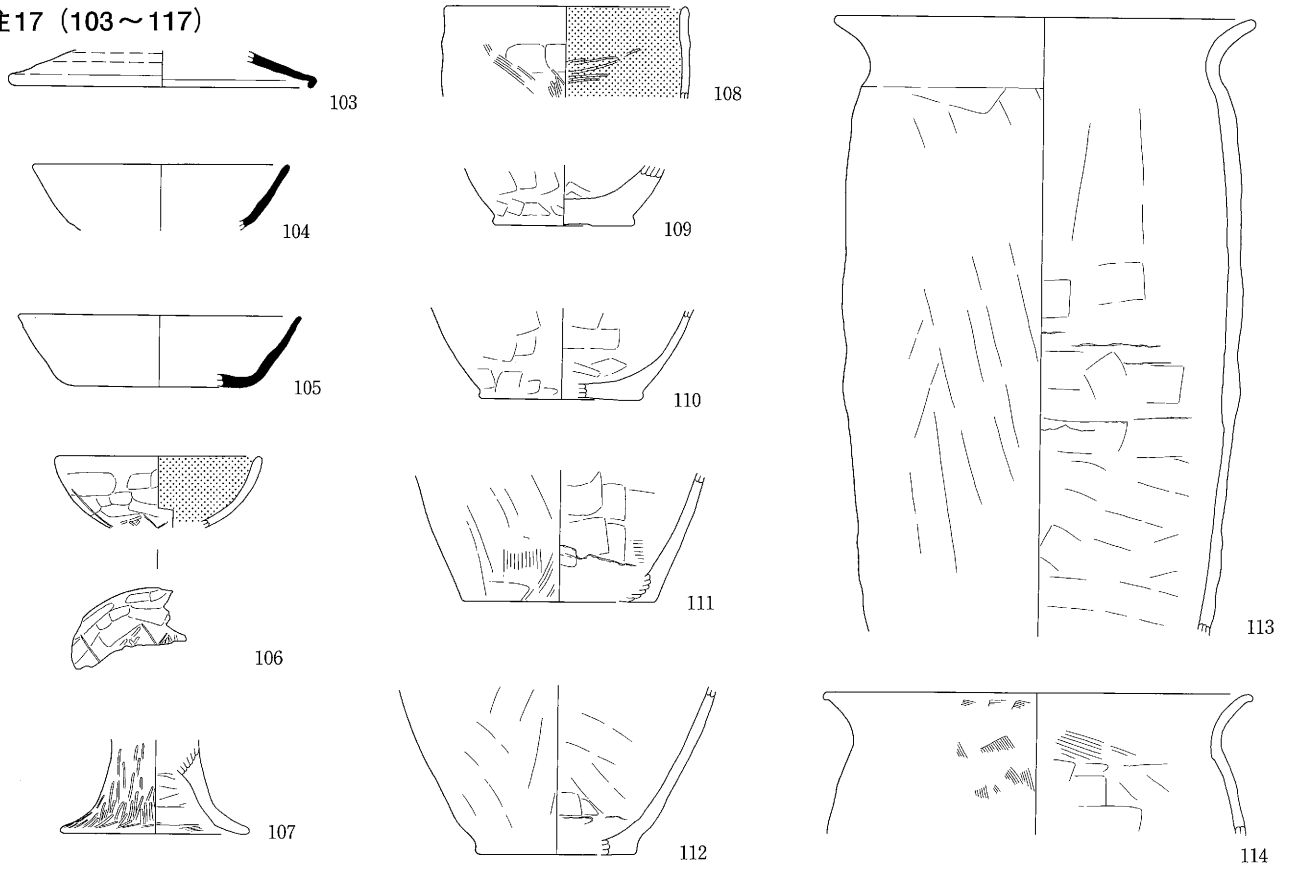
0 10cm

图版9 土器(2)

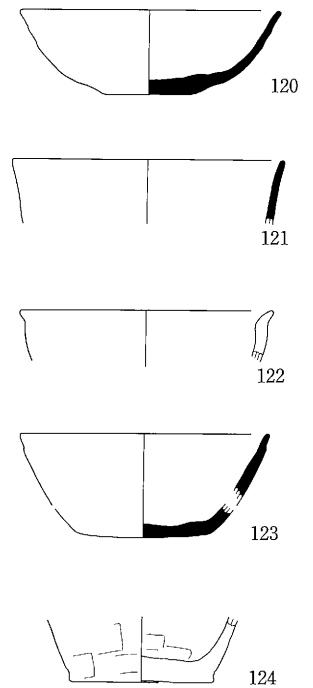


图版10 土器(3)

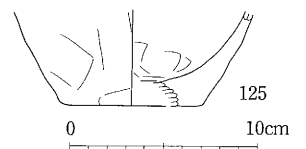
住17 (103~117)



住27 (120~125)

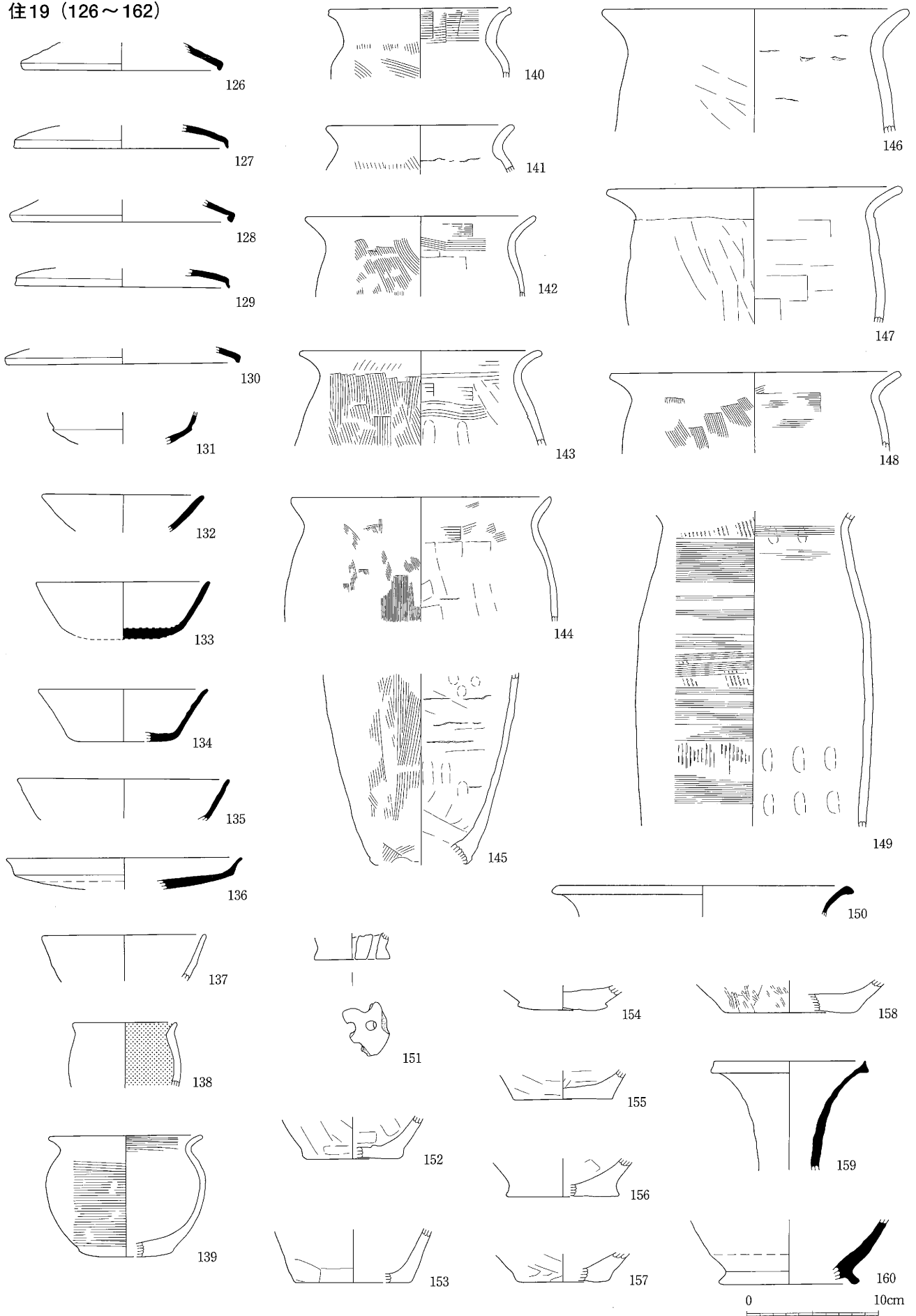


住20 (118~119)

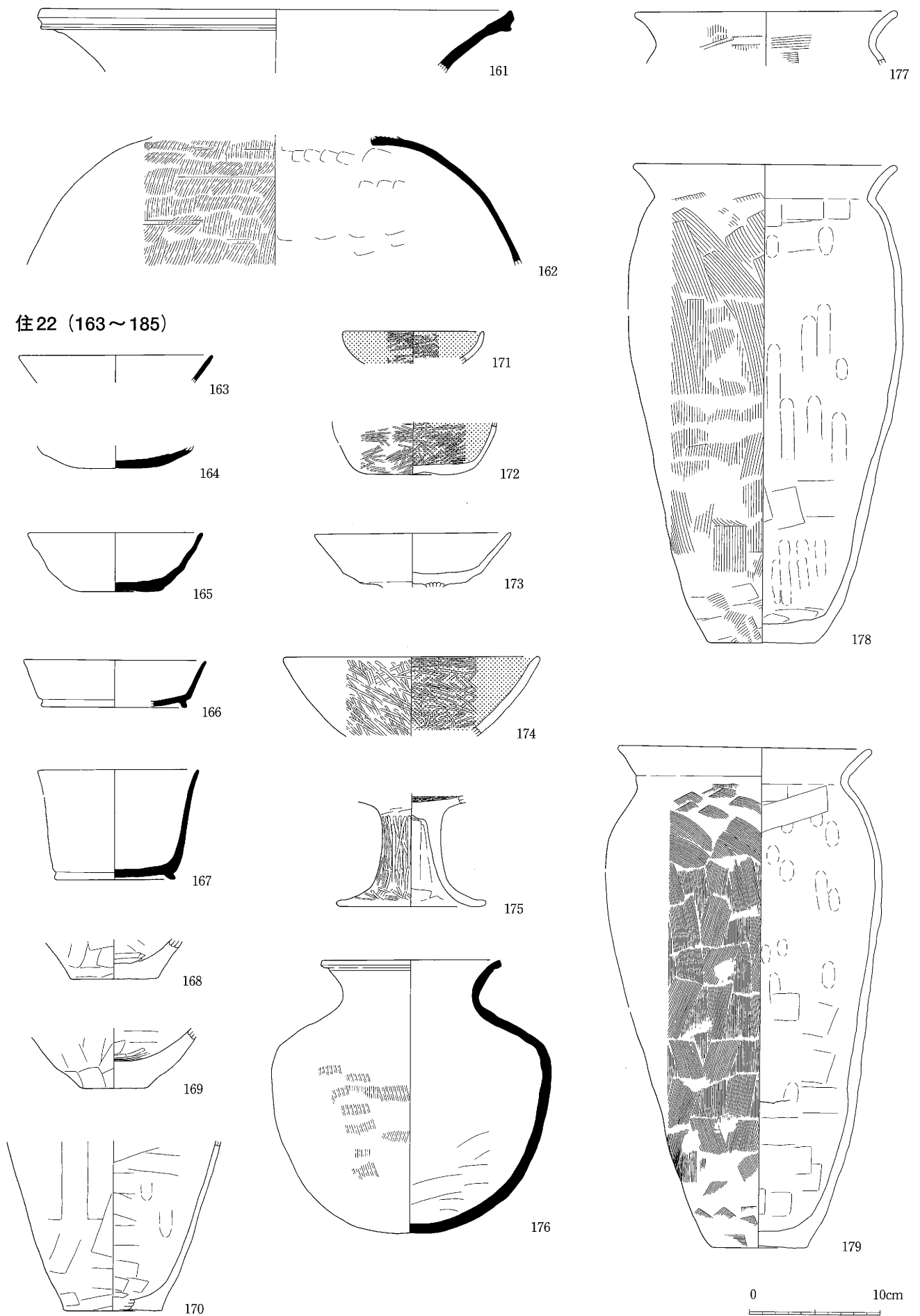


図版11 土器(4)

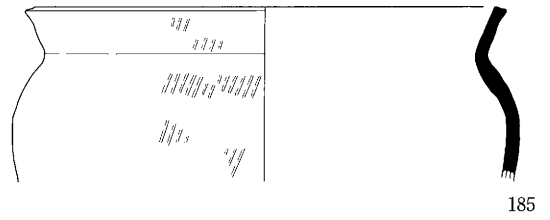
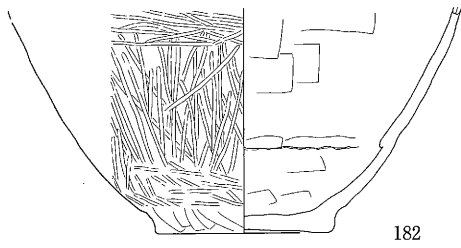
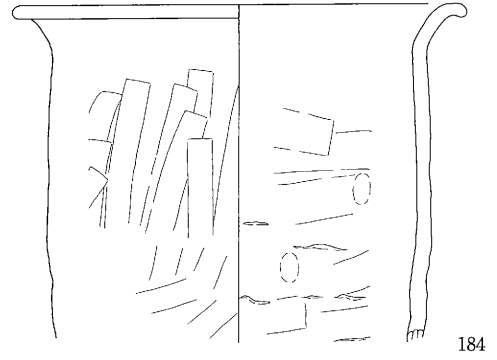
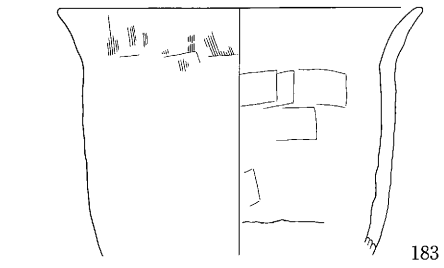
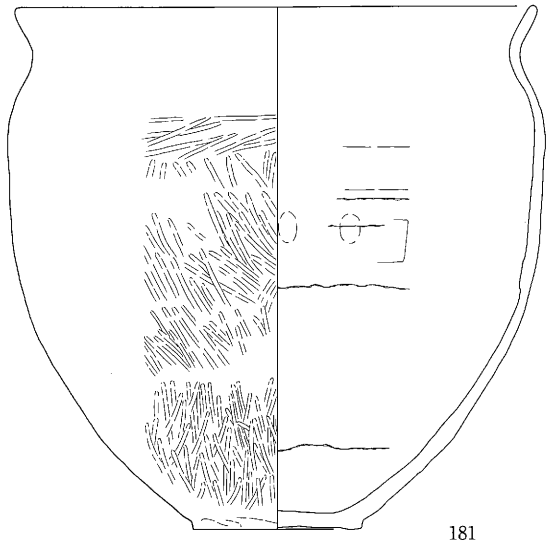
住19 (126~162)



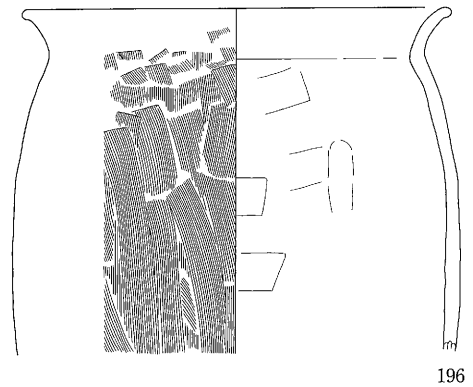
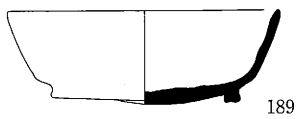
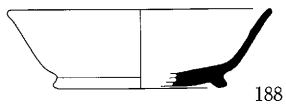
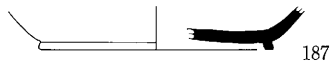
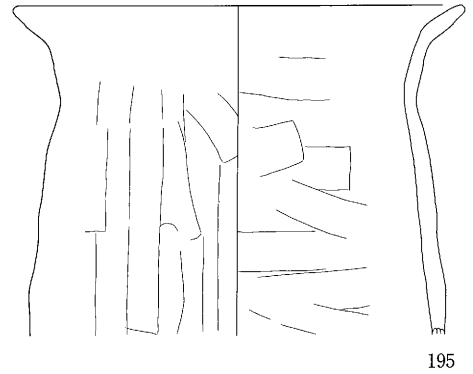
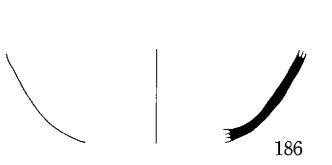
图版12 土器(5)



图版13 土器(6)



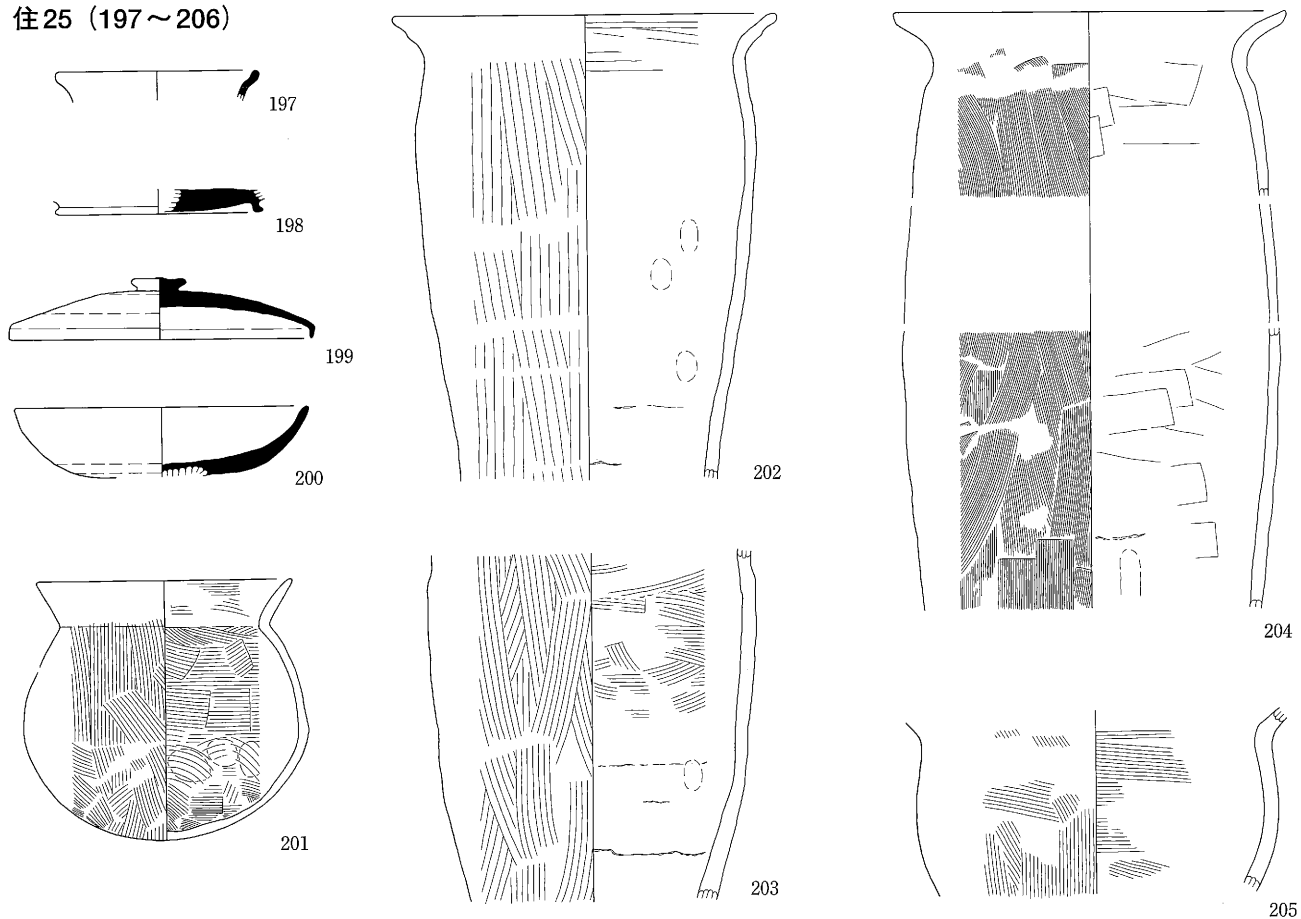
住26 (186~196)



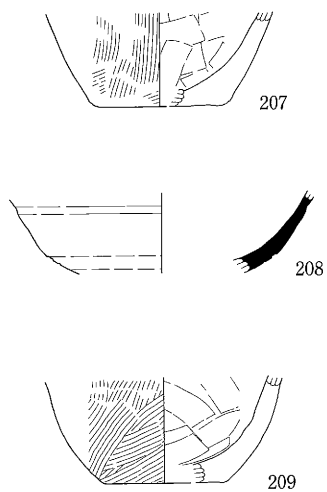
0 10cm

图版14 土器(7)

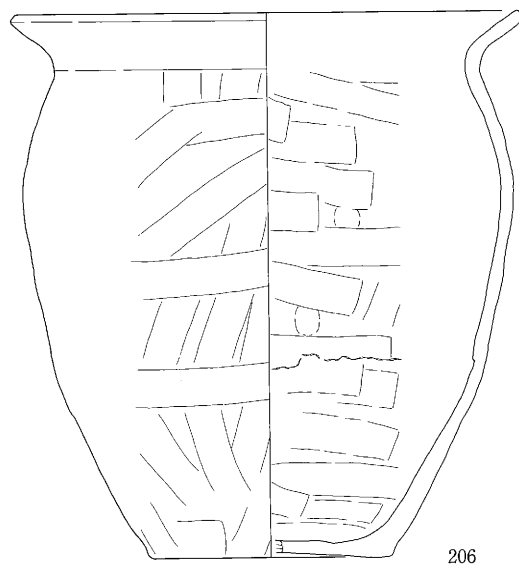
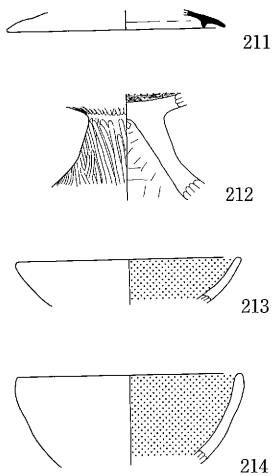
住25 (197~206)



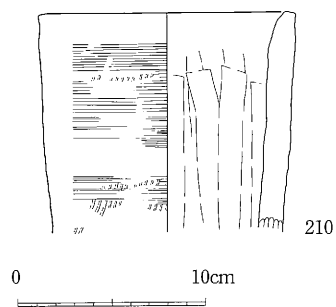
住24 (207~209)



グリッド (211~214)



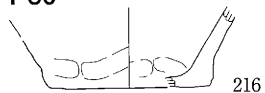
溝6



P54



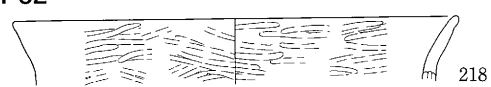
P50



P9



P52

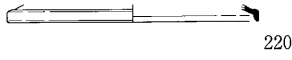


図版15 土器(8)

住23 (219~241)



219



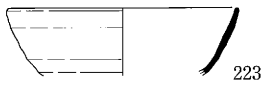
220



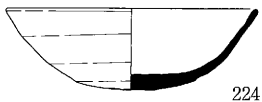
221



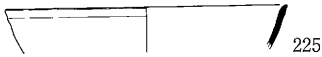
222



223



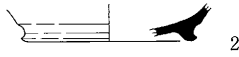
224



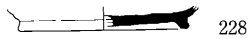
225



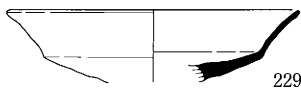
226



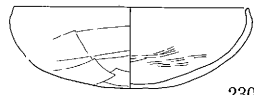
227



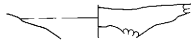
228



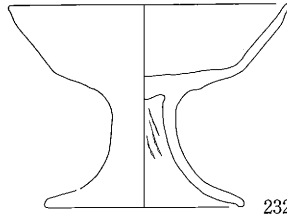
229



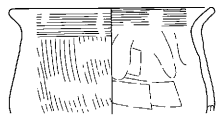
230



231



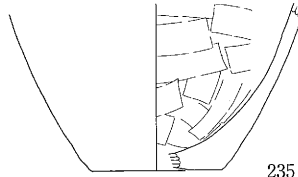
232



233



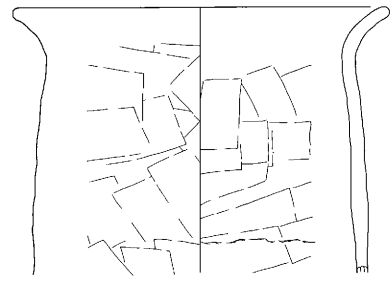
234



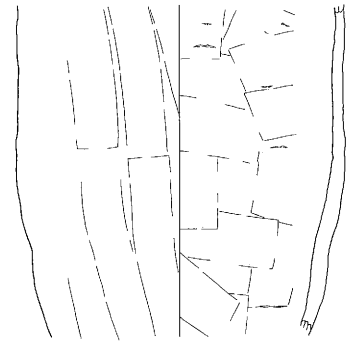
235



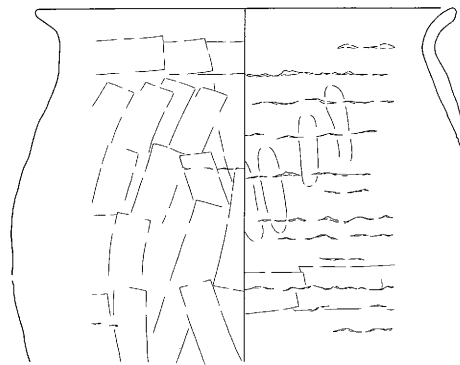
236



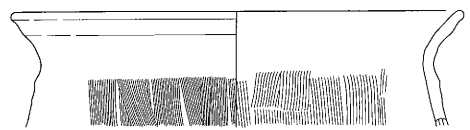
237



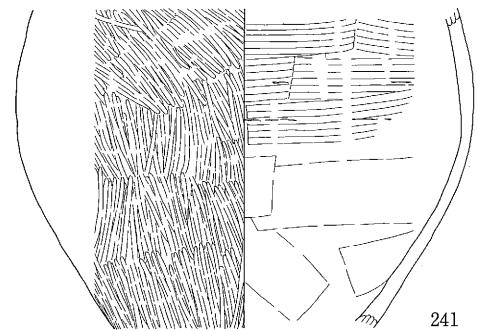
238



239



240



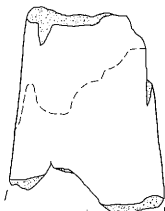
241

土製品

住19 (242・243)



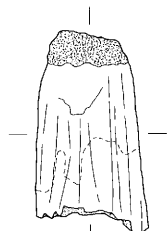
242



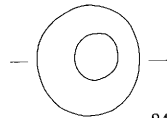
243



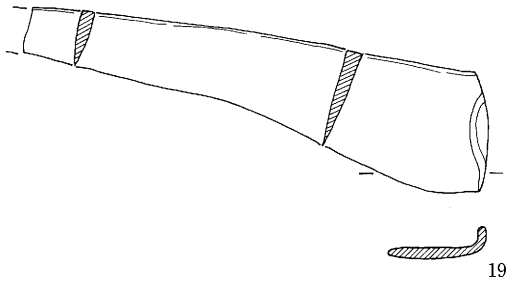
住26 (244)



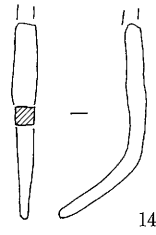
244



0 10cm



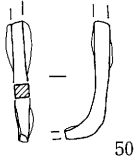
19



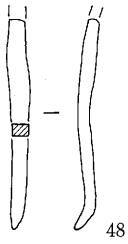
14



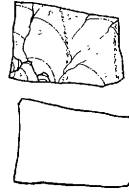
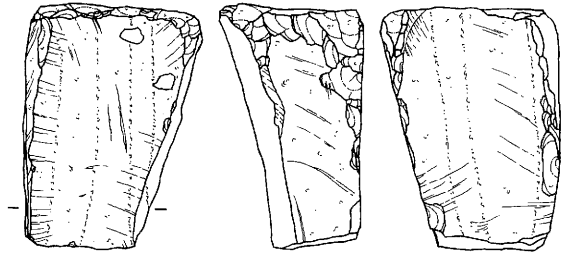
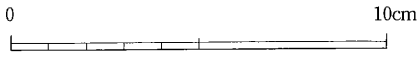
44



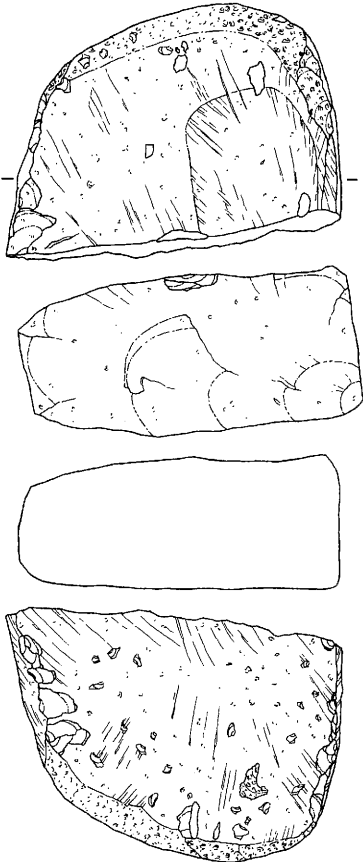
50



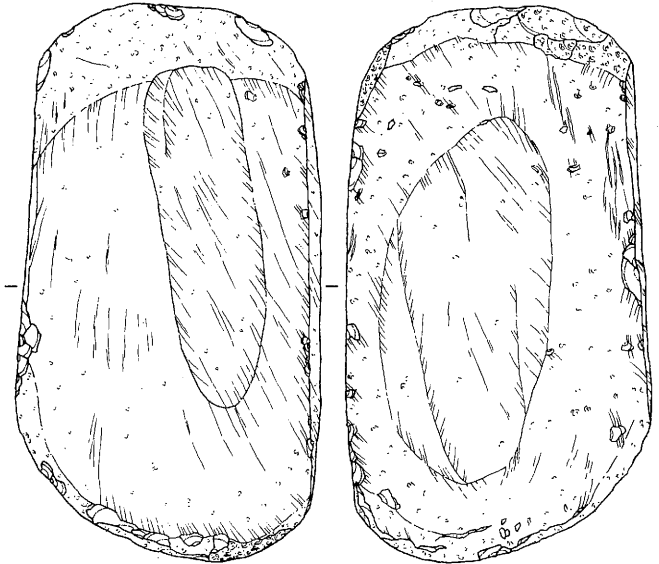
48



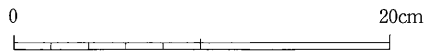
30
砥石状石器
1118.0g
砂岩
住21 No.1



28
砥石状石器
2595.0g
砂岩
住15 No.1



29
砥石状石器
4635.0g
砂岩
住19 No.11



图版17 金属器、石器



a 区全景 (東から)



b・c 区全景 (南から)

写真図版2



a 区西壁層序



住15カマド



住15排煙口



住15ベルト北断面 (西から)



住17カマド



住17カマド断面



住22カマド



住23 a 区東壁断面

長野県松本市 平田北遺跡Ⅵ 緊急発掘調査報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとし ひらたきたいせき きんきゅうはくつちようさほうこくしょ
書名	長野県松本市 平田北遺跡Ⅵ 緊急発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	松本市文化財調査報告
シリーズ番号	No.152
編著者名	太田守夫 田多井用章 直井雅尚 加島泰祐
編集機関	松本市教育委員会
所在地	〒390-8620 長野県松本市丸の内3番7号
発行年月日	平成13年3月23日(平成12年度)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)		調査原因
		市町村	遺跡番号				A区	B・C区	
ひらたきたいせき 平田北	まつもととしよしの 松本市芳野 19番48号	20202	291	36度 12分 02秒	137度 58分 04秒	19991124～ 19991227	A区 452.0m ²	B・C区 202.2m ²	民間開発事業 (研究棟建設)
							計654.2m ²		
所収遺跡名	種別	主な時代(A・B・C区)		主な遺構(A・B・C区)		主な遺物(A・B・C区)		特記事項	
平田北	集落跡	古代 (奈良時代初頭)		竪穴住居址 建物址 土坑 ピット 溝	12棟 5棟 16基 75基 5条	石器(砥石状石器) 土器(土師器 須恵器) 金属器(鉄器)		平田北地域で奈良時代初頭の遺構群を確認した。同地域に広く分布する平安時代の遺構を確認できなかった。	

松本市文化財調査報告 No.152
長野県松本市
平田北遺跡Ⅵ
緊急発掘調査報告書

発行日 平成13年3月23日

発行 松本市教育委員会
〒390-8620 長野県松本市丸の内3番7号

印刷 株式会社 総合印刷
〒399-0701 長野県塩尻市広丘吉田659-1

